

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.239

2013年4月

平成24年度卒業式を挙行



目次

●ニュース	
平成24年度卒業式を挙	3
東海圏減災研究コンソーシアム設立記念行事を開催	12
タイ王国のチュラポーン王女殿下が本学を訪問	13
ベトナム司法省と連携覚書を締結	14
地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業に採択される	14
第4回名古屋大学基金感謝の集いを開催	15
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	15
第2回 URA シンポジウムを開催	16
大学院博士課程の学生2名が日本学術振興会育志賞を受賞	16
2012年度学生論文コンテストの表彰式を挙	17
巽 和行物質科学国際研究センター長が日本学士院賞を受賞	18
平成24年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催	18
退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	18
●知の未来へ	
ドイツにみる脱原発のゆくえー環境社会学の視点から	19
青木 聡子（環境学研究科准教授）	
●知の先端	
アフリカでイネをつくる	20
浅沼 修一（農学国際教育協力研究センター教授）	
●学生の元気	
平成24年度名古屋大学総長顕彰 6名3団体表彰	22
平成24年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	24
●部局ニュース	
臨床研究中核拠点及びトランスレーショナル・リサーチ拠点開設記念式典を挙	27
行	
クリニカルシミュレーションセンター開設記念式典を挙	28
行	
動物慰霊祭を挙	28
行	
国際シンポジウムを開催	29
国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」を開催	29
「現代の日本社会と青年の自殺問題について考えるセミナー」を開催	30
大学教育改革フォーラム in 東海2013を開催	30
第15回 AMS シンポジウムを開催	31
合同シンポジウム「東日本大震災の自治体対応」を開催	31
国際研究会「ゼロ度における高エネルギー散乱」を開催	32
拠点国際会議を開催	32
シンポジウム「多様な性と生を考える」を開催	33
ICCAE 第5回オープンセミナーを開催	33
ICCAE 第6回オープンセミナーを開催	33
第87回防災アカデミーを開催	34
第88回防災アカデミーを開催	34
「ゆかり交流ラウンジ」開所式を挙	34
行	
第28回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	35
第26回博物館企画展「ボタニカルアートと明治の博物画」を開催	35
第4回地球教室「鉱物をさがそう！」を開催	35
第48回博物館コンサートを開催	36
第49回博物館コンサートを開催	36
●資料	
平成25年度名古屋大学組織図	37
●受賞者一覧	38
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年2月16日～3月15日	41
●イベントカレンダー	44
●ちょっと名大史	
学部の誕生と草創期⑥ ー 経済学部 ー	48

平成24年度卒業式を挙





平成24年度名古屋大学卒業式が、3月25日(月)、豊田講堂において挙行されました。

午前9時30分から修士・専門職・博士学位記授与式が、続いて午後11時40分から学士学位記授与式が行われ、会場の豊田講堂は卒業生で満員となりました。

卒業式は名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まり、檀上列席者全員が、昨年制定されたアカデミックガウンを着用して式典に臨みました。来賓の方々が見守る中、濱口総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,618名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生67名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生212名に博士学位記が、また、学部卒業生2,146名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、大学院文学研究科博士課程前期課程修了生の白楊さんが修了生総代として、また、経済学部卒業生の



鈴木健介さんが卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)より心のもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

その後、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍の光」を全員で合唱しました。今年は、「蛍の光」の歌詞を会場前方のスクリーンに映したことにより、卒業生は例年にも増してしっかりとした声音で歌っていました。名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

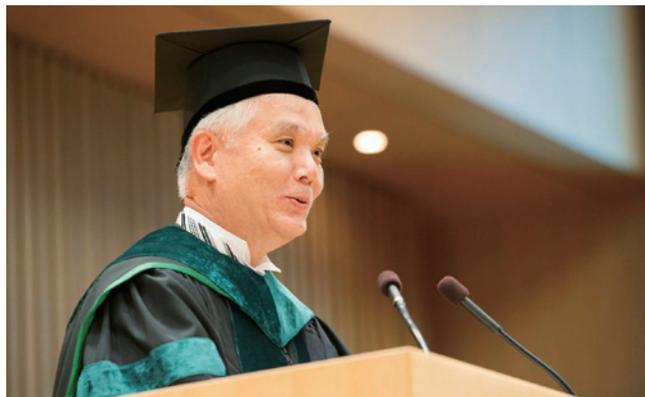
卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、豊田講堂ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/videoarchive/index.html>)で視聴することができます。

平成24年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成



名古屋大学は、本日ここに、平成24年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,618名に修士学位記を、大学院専門職学位課程修了者67名に専門職学位記を、医学博士課程及び博士課程後期課程修了者212名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

また本日は、名古屋大学にとっても記念すべき修了式を迎えることとなりました。創立以来、新制大学の博士号を授与された方が、ついに1万人を超えたことです。この数字の中に、名古屋大学が営々として築き上げてきた歴史が示されています。

さて、今日皆さんは、改めて、大学での生活を思い起こし、様々な出来事を振り返られている事と思います。皆さんの名大での学生生活は、どのようなものだったでしょうか。入学した時の期待通りのものでしたでしょうか。どんなことが、心に残っていますか。

皆さんが学生生活を過ごした時期は、日本にとって、大きく価値観が変換する時代でした。この間、様々な出来事がありましたが、とりわけ我々に衝撃を与えたのは、一昨年の中東大震災でした。振り返れば、20世紀の科学は多くの利便性と快適性、長寿と物質的幸福を人類社会にもたらしました。しかし一方で、科学の進展は、人口爆発や資源枯渇、食糧危機、環境破壊等の深刻な危機を生み出し、従来の科学では解決困難な、多様な、そして地球規模で起る課題に、われわれは直面しています。

これらの背景のもと、いま日本の大学院教育に、イノベーションを実現できる人材の育成が求められています。イノベーションという言葉は、もちろんご存知でしょうね。

第4期科学技術基本計画は、潜在的な科学技術力を、経済・社会の広範な分野での我が国発のイノベーションの実現を通じて、本格的な産業競争力の優位性や、安全、健康等広範な社会的な課題解決などへの貢献に結び付け、日本経済と国民生活の持続的な繁栄を確実なものにしていくことが重要であると述べています。そして、イノベーションを「科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し発展させ、新たな社会的価値や経済的価値を生み出す革新」と定義付けています。

ここで述べられている、科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し発展させ、新たな社会的価値や経済的価値を生み出す人材は、どうしたら育成できるのでしょうか。言い換えると、諸君のような大学院を修了した人材が、イノベーターとして育ち、革新的な価値を創造できるようになるためには、どんな教育が必要なのでしょうか。

ハーバード大学教授のクリステンセンは、革新的な製品・サービスを開発した百名近いイノベーターにインタビューし、こんな結論を述べています。イノベーターには2つの共通要素があると。第1に、「イノベーションに取り組む勇気」、そして第2に、「イノベーターとなる5つのスキル」を挙げています。

第1の「イノベーションに取り組む勇気」とはどのような勇気でしょうか。クリステンセンによれば、イノベーターは現状を変えたいという意志に燃えている。こうした変化を起こすため、常に「スマート・リスク」をとると。例えば、スティーブ・ジョブズの言葉、「宇宙に一撃を与えたい」に象徴的に表現されている、現状をかえたいという強い意志が必要だと指摘しています。

第2の「イノベーターとなる5つのスキル」とはどんなものなのでしょうか。関連付ける力、質問力、観察力、ネット

ワーク力、そして実験力の5つのスキルであると、クリステンセンは述べています。

1番目の、関連付ける力とは？ジョブズはこんなことを言っています。“Creativity is connecting things（創造とは結びつけることだ）”

2番目の質問力とは、ラタン・タタの言葉を借りると、「疑う余地のないことを疑え」と。トヨタ式生産方式の基礎を作った大野耐一さんの言葉では、最低5回、「なぜ」という問いかけをしろと。徹底した疑問の投げかけがイノベーションを生み出す原動力になるのです。

3番目の観察力は、質問力、実験力の基礎になる力でもあります。スコット・クックによれば、「観察はわが社最大のゲーム・チェンジャーだ」そうです。

4番目のネットワーク力とは、当然様々な人材とのネットワークを持つことを意味しています。アルバート・アインシュタインはこんなことを言っています。「他人の思考や経験に触発されずに自分1人で行うことは、どんなに良くても、いささかつまらないし単調だ」と。

そして5番目の実験力。理系の方は、もちろん実験力なしには大学院を修了できませんが、実社会に出ても、この実験力はとても大切です。アマゾンを作ったベソスはこんなことを言っています。「実験はイノベーションのカギだ。予想通りの結果が出ることはめったになく、多くを学べるから」と。

以上のスマートリスクをとる勇気、そして関連付ける力、質問力、観察力、ネットワーク力、実験力の5つのスキルは、大学院の体験の中で、多少なりとも身についたでしょうか。私には、これらの項目は、「勇気ある知識人」の条件のようにも思えてなりません。

確かに、我々人類はいま、従来の科学では解決困難な、



多様な、そして地球規模で起きる課題に直面しています。しかし考え方をかえれば、今私達は、劇的な体験のできる時代を生きているのかもしれませんが。言い換えれば、様々なやりがいと可能性に満ちた時代を生きているのかもしれませんが。

そして、その可能性を現実にする力は、君達若者の中にあります。更に、君たちの力を生かす解決法は、科学技術の発展の中にあると私は思います。いま我々は、新しい発想と価値観を持った、困難を解決できる科学技術・イノベーションが必要なのです。皆さんは、どのような現場で働くとも、我々の抱えている困難をまっすぐに見据え、困難に挑戦し続ける人材、革新的な価値を創造する人材、「勇気ある知識人」となっていただきたい、これが皆さんの卒業にあたっての、私からのお願いです。

卒業おめでとう。皆さんの豊かな未来を祈念いたします。



平成24年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成



皆さん、ご卒業おめでとうございます。名古屋大学は、本日ここに、平成24年度の学部卒業生2,146名に、学士の学位記を授与いたしました。卒業式を迎えた皆さんに、名古屋大学教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。大学での勉学を糧に希望に満ちて旅立ちされる皆さんをお送りすることは、私ども大学人にとって、最上の喜びであります。おめでとう。

さて、卒業式にあたり、皆さんは、大学での生活を思い起こし、在学中の様々な出来事を改めて振り返っておられるでしょう。皆さんの名大での学生生活は、どんなものだったでしょうか。入学した時の期待通りのものでしたでしょうか。どんなことが、心に残っていますか。きっと、様々な思いにあふれていることでしょう。

4年前、皆さんの入学式にあたって、私がお願いしたことがあります。覚えていますか。1点目は、志を立て、自立するという事。市内の方には、できれば下宿して、孤独を体験してくださいとお願いしました。孤独を味わうことは、自立への一歩です。できましたか。それから志を立てるという事。大学の4年間は、自分がどんな仕事につき、どんな生涯を送るか、基本となる設計図を描く時期です。準備はできたでしょうか。

2点目。英語をしっかりと勉強して、海外体験をしてくださいとお願いしました。いかがでしたか。数日でも海外に出かけることはできましたか。自分の英語に自信を持てたでしょうか。

3点目、友達を作り、課外活動に参加し、自分の中に眠っている潜在能力に目覚めてくださいとお願いしました。いかがでしたか。高校までの自分とは違う自分に気が付くことができたでしょうか。思いもよらぬ自分の可能性に目覚めることができたでしょうか。

改めて申し上げたいこと。大切なことは、自分はこんなもんだなどと決めつけしないで、自分の能力と可能性を信頼することです。明日からの新しい生活の中で、まず自分の能力を信頼し、困難に向かっていたいただきたいと思います。

振り返れば、皆さんが学生生活を過ごしたこの4年間は、日本にとって、大きく価値観が変換する時代でした。私たちは今、明治・終戦後に続く第3の時代の転換点に生きていると思います。この4年間、様々な出来事がありましたが、とりわけ我々に衝撃を与えたのは、一昨年の中日本大震災でした。お祝いの式典ではありますが、皆さんの卒業式にあたり、この大震災のもたらした意味について、改めて考えてみたいと思います。

皆さんは東日本大震災について、どう考えておられますか。私は、東日本大震災の発生以来、折に触れて、アンドレ・ジイドの言葉を思い起こします。それは、「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」という言葉です。40年以上前の事です。この言葉を読んだ時は、何とも詭弁的な表現に思え、心理的に抵抗を感じました。しかし、大震災の後、この言葉が繰り返し心に浮かびます。「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」。この言葉は、誠実な毎日を送ることのむずかしさを意味していると思いますが、他方で一見平凡に見える毎日が、実はかけがえのない時間である事も示しているように思います。

よく見てください。今日の青い空、満開の桜、どれ一つをとっても、かけがえのない時間です。そしてまた、明日からの1日1日も、雨の日も、風の日も、真夏の炎天も、同様にかけがえのない日々なのです。

皆さんが、今日の卒業式を迎えるまでの22年間余りの生活は、一見平凡なものに見えていても、実はかけがえのない生活であったと言えます。そして、この幸福は、君たち

のお父さん、お母さんは勿論、多くの人々の支えによって実現したものでもあります。だから、私達は、幸福であることへの責任があるといえます。大震災を振り返り、改めてかけがえのない存在として、家族、友人を大切にする事。そして、毎日毎日を真剣に、誠実に生きる事が求められています。そして、平凡に思える毎日が、実はかけがえのない幸福である事を改めて実感していただくと共に、自分の幸福を自分だけのものにしてしまうことのないようお願いいたします。

もう1つのお願い。名古屋大学を卒業する今日、改めてあなた自身の志を立てていただきたい。自分がどうしたら社会の役に立てるか、自分の仕事に専念する中で、人々の幸福を支えることができるか。これから就職する方々は、現場に出てみると、毎日の仕事がつまらない、飽き足らないものに見える事があるかもしれません。しかし、すぐにあきらめることなく、平凡に思える仕事の連続の先にある非凡を冷静に描き、誠実に自分なりの人生を送っていただきたいと願います。

さて、いま日本は少子高齢化時代を迎え、また長期にわたる不況の中、大震災を体験し、厳しい時代を迎えています。この急速に進展する少子高齢化は、人類社会の中で、日本が初めて体験する困難です。今直面する困難を越え、果たして日本は発展できるでしょうか。世界は、日本の動向を見ています。日本は、この困難を越える事が出来るのかと。私は、大丈夫だと思います。なぜなら、日本は今まで多くの困難を体験してきました。関東大震災や戦後の荒廃など。その中で、日本人は学習し、対策を深め、科学技術を磨く事により、日本は立ち直ってきました。確かに復興はゆっくりとしていますが、日本経済は回復しつつあります。



今私達は、劇的な体験ができる時代を生きているのかもしれない。それは、我々が今抱えている様々な困難を越え、日本の持つ力強さを示す時代、言い換えれば様々なやりがいと可能性に満ちた時代を生きているのかもしれない。そして、その可能性を現実にする力は、君達若者の中にあります。これから諸君が、多くの方と出会い、成長し続け、「勇気ある知識人」として、新しい時代を切り開く原動力となっただけの事を、祈ります。それからもう1つ、卒業し、自活できるようになったら、素晴らしい伴侶を見つけ、家族を作ってください、これが私の3番目のお願いです。いま日本は、急速に少子高齢化社会、つまり日本は人口減少社会に突入しています。だから、私のお願いは、幸せな結婚をし、家族を作ってください。君たちが幸せな家族を作ることが、日本の未来につながるのです。

皆さんの輝かしい未来を祈念します。本日は卒業おめでとう。



来賓祝辞（大学院修了式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような荘厳なる修了式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日大学院を修了された皆様に心よりお祝いを申し上げます。先ほど、総長より学位記を受け取られた代表の皆様それぞれが、すばらしい顔をされておられました。大学院でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。

あまり難しいことを申し上げるつもりはございませんが、先ほど、総長が言われたことをしっかりと心に刻み、これからの長い人生を素晴らしいものにしていただきたいと思います。

さてこの数年、日本は、リーマンショックや東日本大震災といった未曾有の危機に直面しました。現在日本は、多少経済の景色が変わる兆しが見え始めたとは申しませんが、内外に山積する幾多の課題を抱え、国として新たな活路を拓いて行くためには、決して楽観は許されず、いまだ、道遠しの状況にあると思います。

一方でアジアを中心とする新興国の躍進は、目覚ましいものがあり、今日では、世界経済をけん引する原動力となりつつあり、産業・企業をめぐるグローバルな競争は激化の一途をたどっております。また、ご承知の通り、世界は、ITをはじめ環境やエネルギー、安全・安心といった分野などでは次世代技術を巡って開発競争の真っ只中にございます。

こうした激動の時代の中で、本日学窓を巣立つ皆様には、決して内向きにならず、世界の中の日本という視点に立って、謙虚な姿勢で他に学び、自らの頭で考え、愚直に汗をかいて、行動することを、是非大切にいただきたいと思います。

皆様には、将来、日本の新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思います。

さて、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下で、大学の法人化と国際化に対応した大学づくりを進めておられ、現在、中期目標・中期計画の達成に向けて努力されていると伺っております。とくに、「名古屋大学から Nagoya University へ」という濱口プランに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進など、大学の国際化を強力に進めておられます。今回、私も含めて壇上の方々が着用しているアカデミックガウンは、留学生からの強い希望があり制定されたと伺っており、これも国際化の一環とみなすことができると思います。

現在、日本は、産業・企業だけでなく大学もグローバルな競争に直面しております。私は、21世紀の名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。幸いにも、名古屋大学は政府が支援するグローバル30に採択され、すでに学部および大学院では、優秀な外国人留学生を受け入れて、英語だけで授業を行う各種国際プログラムが進められ、今後さらに拡充する計画であると伺っております。

また、昨年秋には、文部科学省が開始した、世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）に採択され、学内にトランスフォーマティブ生命分子研究所がこの4月に創設されると聞いております。海外の研究者を含む新進気鋭の研究者を集め、生命科学・技術を根底から変える革新的機能分子である「トランスフォーマティブ生命分子」を生み出すことを目的とされており、大学の国際競争力の向上はもとより、広く国際社会に貢献するものと期待されております。

私は、特に、名古屋大学が、モノづくりに特徴をもつ中部地区に位置する日本の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で、世界屈指の魅力ある大学となることを期待しております。

そのためには、私は名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いていただきたいと思っております。この目的を達成するため、名古屋大学は、全卒業生の電子名簿を整備中と伺っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し10年がたちました。これまで、関東支部、関西支部および遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオスの11の海外支部を作って参りました。昨年10月のホームカミングデイでは、名古屋大学全学同窓会設立10周年を記念して、全ての海外支部の代表をお招きし、濱口総長にもご参加いただき交流会を行いました。これらの名古屋大学留学経験者の方々は、名古屋大学に大変感謝されており、交流会では大変楽しい語らいを致しました。皆様は、今後、海外でご活躍される方が、多数いらっしゃると思いますが、是非、これらの支部をご活用いただければ幸いです。また、名古屋大学を支援するため、全学同窓会は、名大基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております、是非ともこのカードに入



会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思います。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学ほか4大学の全体の同窓会として、学士会というものがございませう。学士会は現在、会員は約7万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、ぜひ皆さんに学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、健康には十分ご留意され、名古屋大学大学院の修了生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



来賓祝辞（学部卒業式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような荘厳なる卒業式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日卒業された皆様に心よりお祝いを申し上げます。先ほど、総長より学位記を受け取られた代表の皆様それぞれが、すばらしい顔をされておられました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。

あまり難しいことを申し上げるつもりはございませんが、先ほど、総長が言われたことをしっかりと心に刻み、これからの長い人生を素晴らしいものにしていただきたいと思います。

さてこの数年、日本は、リーマンショックや東日本大震災といった未曾有の危機に直面しました。現在日本は、多少経済の景色が変わる兆しが見え始めたとは申しませんが、内外に山積する幾多の課題を抱え、国として新たな活路を拓いて行くためには、決して楽観は許されず、いまだ、道遠しの状況にあると思います。

一方でアジアを中心とする新興国の躍進は、目覚ましいものがあり、今日では、世界経済をけん引する原動力となりつつあり、産業・企業をめぐるグローバルな競争は激化の一途をたどっております。また、ご承知の通り、世界は、ITをはじめ環境やエネルギー、安全・安心といった分野などでは次世代技術を巡って開発競争の真っ只中にございます。

こうした激動の時代の中で、本日学窓を巣立つ皆様には、決して内向きにならず、世界の中の日本という視点に立って、謙虚な姿勢で他に学び、自らの頭で考え、愚直に汗をかいて、行動することを、是非大切にいただきたいと思います。

皆様には、将来、日本の新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思います。

さて、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下で、大学の法人化と国際化に対応した大学づくりを進めておられ、現在、中期目標・中期計画の達成に向けて努力されていると伺っております。とくに、「名古屋大学から Nagoya University」という濱口プランに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進など、大学の国際化を強力に進めておられます。今回、私も含めて壇上の方々が着用しているアカデミックガウンは、留学生からの強い希望があり制定されたと伺っており、これも国際化の一環とみなすことができると思います。

現在、日本は、産業・企業だけでなく大学もグローバルな競争に直面しております。私は、21世紀の名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。幸いにも、名古屋大学は政府が支援するグローバル30に採択され、すでに学部および大学院では、優秀な外国人留学生を受け入れて、英語だけで授業を行う各種国際プログラムが進められ、今後さらに拡充する計画であると伺っております。

また、昨年秋には、文部科学省が開始した、世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）に採択され、学内にトランスフォーマティブ生命分子研究所がこの4月に創設されると聞いております。海外の研究者を含む新進気鋭の研究者を集め、生命科学・技術を根底から変える革新的機能分子である「トランスフォーマティブ生命分子」を生み出すことを目的とされており、大学の国際競争力の向上はもとより、広く国際社会に貢献するものと期待されております。

私は、特に、名古屋大学が、モノづくりに特徴をもつ中部地区に位置する日本の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で、世界屈指の魅力ある大学となることを期待しております。

そのためには、私は名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。この目的を達成するため、名古屋大学は、全卒業生の電子名簿を整備中と伺っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し10年がたちました。これまで、関東支部、関西支部及び遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオスの11の海外支部を作って参りました。昨年10月のホームカミングデーでは、名古屋大学全学同窓会設立10周年を記念して、全ての海外支部の代表をお招きし、濱口総長にもご参加いただき交流会を行いました。これらの名古屋大学留学経験者は、名古屋大学に大変感謝されており、交流会では大変楽しい語らいを致しました。皆様は、今後海外でご活躍される方が、多数いらっしゃると思いますが、是非、これらの支部をご活用いただければ幸いです。また、名古屋大学を支援するため、全学同窓会は、名大基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております、是非ともこのカードに入会していただ



き、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思います。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学ほか4大学の全体の同窓会として、学士会というものがございまして。学士会は現在、会員は約7万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、ぜひ皆さんに学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、健康には十分ご留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



東海圏減災研究コンソーシアム設立記念行事を開催

東海圏減災研究コンソーシアム設立記念行事が、3月3日(日)、野依記念学术交流館において開催されました。当日は、大学、企業、NPO等から関係者ら200名を超える出席がありました。

同コンソーシアムは、南海トラフ巨大地震等の発生による甚大な被害の危険性が指摘されている東海地域において、岐阜大学研究推進・社会連携機構社会資本アセットマネジメント技術研究センター、静岡大学防災総合センター、名古屋工業大学高度防災工学センター、豊橋技術科学大学安全安心地域共創リサーチセンター、三重大学自然災害対策室、本学減災連携研究センターの6国立大学法人の防災・減災関連研究組織が互いに連携し、防災・減災に関する教育・研究を推進することで、安全・安心な地域社会の実現の目指す組織であり、同日午前に行われた調印式を経て発足しました。

同日午後から行われた設立記念行事では、鷺谷 威減災連携研究センター教授によるコンソーシアムの概要説明の後、濱口総長よりあいさつがあり、大学間で連携し、それを地域の減災につなげることへの期待が示されました。そ



会場の様子



調印式の様子

の後、寺田博幹文部科学省研究開発局地震・防災研究課長より祝辞が述べられ、切迫した問題に対し同コンソーシアムが地域と連携し対応することへの期待が示されました。

続いて、中島正愛京都大学防災研究所所長より、「防災・減災の切り札－地域連携・水平展開による実践的研究への期待」と題した講演があり、巨大災害に対しては短期的視点に捉われず、広域的かつ長期的な視点から対応策を考えることの重要性が説明されました。

記念行事後半には、「南海トラフ巨大地震克服のための大学力を結集した東海圏減災プロジェクト」と題し、福和減災連携研究センター長のコーディネートのもと、パネルディスカッションが行われました。まず6大学の各組織のセンター長及び室長が各大学での取り組みを紹介し、その上で、各組織が同コンソーシアムに期待することを述べました。

続いて、梅山和成国土交通省中部地方整備局長、菅原章文中部経済連合常務理事、栗田暢之レスキューストックヤード代表理事より、地域社会における同コンソーシアムの果たす役割について、それぞれ官、産、民の立場より意見が述べられました。また、教育・研究分野におけるコンソーシアム設立の意義について議論が行われ、特に地域社会と連携し、研究成果の社会実装の重要性が確認されました。

その後行われた記念交流会では、産官学民の各分野の参加者が一堂に会し、問題意識を共有するとともに、東海圏の減災に向けた連携のあり方などについて活発な議論がなされました。

タイ王国のチュラポーン王女殿下が本学を訪問

タイ王国のチュラポーン・マヒドン王女殿下が、2月22日(金)、本学を訪問し、王女殿下が所長を務めるチュラポーン研究所及びチュラポーン大学院大学と本学との大学間学術交流協定を更新しました。

王女殿下は、天然物化学の分野で博士号を持ち、ユネスコをはじめとする多くの機関からの受賞歴がある研究者として知られています。今回の訪問の目的は、2008年にタイで調印した同協定を更新することでしたが、併せて、前回王女殿下が2007年に来学した時から進捗した、本学の研究について紹介しました。

調印式に先立って、濱口総長、渡辺理事、野依良治特別教授との意見交換が行われました。またこの機会に、5月末からタイのバンコクで開催されるAC21の新規事業「AC21スクーリング」について紹介するとともに、王女殿下の臨席及び講演を直接依頼しました。

調印式には、本学の役員、教職員のほか、同研究所との交流を続けてきた磯部 稔名誉教授が出席しました。王女殿下からは、この協定の更新は、我々が様々な複雑な課題に直面する中で、両機関の連携を更に進めるために極めて



調印式の様子

重要であることが強調されました。

引き続き行われた本学の研究紹介では、今年度採択された世界トップレベル研究拠点プログラム「トランスフォーマティブ生命分子研究所」や、チュラポーン研究所の重点研究分野である大学院医学系研究科の研究活動について紹介しました。

王女殿下はこの他、2008年ノーベル賞展示室を視察し、自身の研究分野に近い下村 脩特別教授の研究成果に強い興味を示されたほか、王女殿下の訪問を歓迎するために集まったタイ人留学生と交流する機会を持ちました。

同協定の更新により、今後、多分野で多様な交流が促進されることが期待されます。



研究紹介の様子



留学生との記念撮影

ベトナム司法省と連携覚書を締結

本学とベトナム司法省との連携覚書調印式が、3月14日（木）、ハノイ市内のベトナム司法省において挙行されました。

調印式では、濱口総長とレー・ティン・ロン ベトナム司法省副大臣が署名し、ハー・フン・クオン同省大臣が立会人となりました。ロン副大臣は、本学の大学院法学研究



署名する様子

科で博士の学位を取得した同窓生であり、全学同窓会ベトナム支部長でもあります。現在、ベトナム司法省には13名の本学同窓生が執務しており、ロン副大臣をはじめ、ダン・ホアン・オアイン同省国際局長など多くの方々が要職に就き、ベトナムの発展に貢献しています。

同覚書は、クオン大臣を団長としてベトナム司法関係者が本学を訪問した際に提案されたものですが、同省としては外国の機関との初めての連携覚書でもあり、この調印を契機として、更なる多様な交流が促進されることが期待されます。

調印式後に省内で行われたシンポジウム「名古屋大学における法学分野のベトナム人人材育成活動」では、総長が本学におけるベトナム人人材育成活動を紹介し、司法省側からは、傘下の機関であるハノイ法科大学や、日本の司法研修所に相当する司法学院における人材育成活動が紹介されました。

地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業に採択される

地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業が選定され、本学から1件が採択されました。

同事業は、地域資源等も柔軟に活用しつつ、産学官が一つ屋根の下に集い新たな産業や雇用を創出するため、革新的課題の研究開発に異分野融合体制で取り組む「場」を「国際科学イノベーション拠点」として整備するものです。対象となる事業は、産学共同利用機器整備事業及び産学共同利用施設整備事業で、対象となる事業者は、大学、大学共同利用機関、高等専門学校、研究開発独立行政法人、都道府県・政令指定都市・国の所管する科学技術を担う法人です。

申請は、全体で59件あり、採択されたのは、15件でした。（採択率25.4パーセント）

本学が採択された事業は以下のとおりです。

名古屋大学モビリティ・イノベーション・コンプレックス拠点

- ・共同提案者：トヨタ自動車株式会社、愛知県、豊田市
- ・拠点計画の概要：少子高齢化に際して、人々は、ふれあいの中で活力ある生活を実現する「小さな社会・大きなつながり」を求めている。東海エリアは自動車産業の世界的集積地であり、名古屋大学はこの研究領域を牽引し、愛知県・豊田市は産学連携を下支える体制を整えてきた。本拠点は、世界を先導する「ものづくり技術」を駆使し、情報とモビリティが統合された革新的移動体「コミュニケーター」を創出し、人のコミュニケーションのあり方を変革する。

第4回名古屋大学基金感謝の集いを開催

第4回名古屋大学基金感謝の集いが、2月16日(土)、豊田講堂において開催されました。

最初に、名古屋大学基金感謝状贈呈式が、濱口総長、各理事、副総長及び監事列席のもと挙行されました。これは、同基金に100口以上の寄附をされた個人の方及び1,000口以上の寄附をされた法人・団体に感謝の意を表するため感謝



コンサートの様子

状及び記念品を贈呈するもので、今回は、昨年2月以降同基金に寄附をされた方々を対象に行われました。

まず総長から、寄附者に対し、同基金の趣旨に賛同し、支援いただいたことに対する感謝の言葉とともに、基金を国際化拠点整備事業（G30）の優秀な留学生への奨学金として活用している旨述べられた後、一人ひとりに感謝状及び記念品が贈呈されました。次に、基金担当の國枝副総長より基金の活用状況報告があり、続いて、現在基金による支援を受けている留学生2名から、感謝の言葉や留学中の苦労話などについて日本語でスピーチが行われました。

その後、ソプラノ歌手の松浪千津子氏をゲストに迎え、名古屋フィルハーモニー交響楽団で活躍する弦楽四重奏団とハープ奏者である神谷朝子氏によるコンサート「四季の愛しさを奏でる～A NEW JOURNEY～」が開催され、感謝状贈呈式の出席者をはじめ同基金への支援者約60名の招待者は、素晴らしい演奏を楽しみました。

コンサート終了後に行われた総長との懇談会では、本学に対する期待と激励の言葉が寄せられるなど、大変有意義な機会となりました。

産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所との技術交流会が、3月5日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

これは、本学と独立行政法人産業技術総合研究所との連携・協力協定に基づく活動の一環として、平成19年の協定締結以来行われているもので、通算11回目の開催となる今



開会あいさつを行う松尾副総長

回は、両機関から計44名が参加しました。

開催にあたり、上田完次産業技術総合研究所理事、産学官連携推進本部長である松尾副総長から開会のあいさつがあり、続いて、平成24年度に実施した6件の共同調査研究について経過報告が行われました。両機関の研究者がペアを組んで行う共同調査研究も、開始から6年目を迎えており、内容も充実し、活発な質疑応答が行われました。

技術交流会後の懇親会では、松尾副総長が乾杯を行い、交流会だけでは議論しきれなかった参加者が活発に意見交換し、盛況の内に閉会しました。

得意分野の技術・研究を互いに補完しながら、両機関間の共同研究等における連携強化及び人的交流の活発化が期待される技術交流会となりました。

第2回 URA シンポジウムを開催

第2回 URA シンポジウム「大学の研究力強化における URA の担うべき役割」が、3月12日(火)、13日(水)の両日、理学南館大講堂において開催されました。

これは、平成24年度文部科学省「リサーチ・アドミニストレーター (URA) を育成・確保するシステムの整備」事業の支援により開催されたもので、本学のリサーチ・ア



総合討論の様子

ドミニストレーション室が幹事を務めました。大学の研究力強化に向けた研究支援・マネジメントを担う URA は、平成23年度に同事業によって本格導入が開始され、現在研究大学を中心に注目を集めています。同シンポジウムも、約70の組織から260名を超す参加者を得るなど、その期待の大きさがうかがえます。

初日は実務者を対象に5つの分科会を実施し、2日目は、大学経営層も対象に各大学の事例紹介、基調講演、総合討論が行われました。基調講演では、菱山 豊文部科学省研究振興局振興企画課長が「我が国を取り巻く研究環境の課題と今後の展望」と題し講演しました。総合討論では、國枝副総長の進行で、安浦寛人九州大学副学長、山崎光悦金沢大学副学長、永里善彦株式会社旭リサーチセンター相談役、越前谷義博 NEDO 技術開発推進部統括調査員、菱山課長をパネリストに、「大学の研究力強化における URA の役割」及び「URA の定着化」という2つのテーマが議論されました。URA は大学の研究力強化のために研究者よりも広い視野で研究戦略を立案する必要があるといった意見や、URA が大学間をローテーションするといった多様な定着の形が提案されました。

大学院博士課程の学生2名が日本学術振興会育志賞を受賞

大学院博士課程の学生2名が、日本学術振興会育志賞を受賞しました。

同賞は、将来我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な博士課程の学生を顕彰することで、若手研究者の養成を図ることを目的として、平成22年度に創設されました。第3回となる今年度は、推薦された124名の中から16名が受賞者として決定され、3月4日(月)、



総長への報告後の記念撮影

日本学士院において授賞式が挙行政され、14日(木)には、理学南館において受賞記念講演会を実施しました。

受賞者とその研究課題・概要は以下のとおりです。

福田真希さん 大学院法学研究科博士課程後期課程3年

- ・研究課題：フランスにおける恩赦の法制史的研究
- ・研究概要：フランスの古代から19世紀の恩赦と権力について、当時の法学書や議事録、恩赦の際に実際に用いられた文書、19世紀については統計も利用し、法制・思想・実態の3側面から検討することで、近代の共和制の権力にとっても、恩赦は重要な意義をもつことを明らかにした。

奥田哲弘さん 大学院理学研究科博士課程後期課程3年

- ・研究課題：花粉管誘引物質群 LUREs およびその受容体同定による花粉管ガイダンス機構の解明
- ・研究概要：候補ペプチドの精製法と、定量的な花粉管誘引アッセイ系を独自に開発して、花粉管誘引物質として LURE1、LURE2 を同定し、これにより花粉管ガイダンスを分子レベルで解析することを可能とした。

2012年度学生論文コンテストの表彰式を挙

2012年度学生論文コンテストの表彰式が、3月7日(木)、附属図書館会議室において開催されました。

同コンテストは、学部学生に「論理的な文章を書く経験」を奨励することを目的として毎年開催しているものです。今回は、過去最多となる40本の投稿論文の中から、山本理事、佐野附属図書館長、戸田山教養教育院副院長、早川高



記念撮影

等教育研究センター長による審査の結果、次の6作品が優秀賞に選ばれました。受賞した論文は、本学の成果物として名古屋大学学術機関リポジトリに登録されます。

優秀賞・名古屋大学生協理事長賞

「書籍再販制の展望」

法学部1年 土屋遼准さん

優秀賞

「大学生の持つ“ひとり”の認識～積極的孤独と消極的孤独～」

文学部1年 吉川千尋さん

「痴漢冤罪の昏き闇 -正しく裁かれる世界へ-」

法学部1年 川浦翔太さん

「ケアから探る、今を生きる意味」

医学部2年 新藤さえさん

「効率主義社会で生きる私達に、“和声”が伝える音楽の癒しとは？」

医学部5年 金山知弘さん

「国際秩序観の相剋としての日清戦争」

医学部5年 山田悠至さん

巽 和行物質科学国際研究センター長が 日本学士院賞を受賞



巽センター長

巽 和行物質科学国際研究センター長が、日本学士院賞を受賞しました。同賞は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置され、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的とする日本学士院が、学術上特にすぐれた論文、著書その他の研究業績に対し授賞するものです。

今回の授賞対象となった研究題目は、「還元系金属酵素活性中心の生物無機化学に関する研究」です。巽センター長は、還元系金属酵素の活性中心に存在する遷移金属硫黄クラスターのモデルとなる金属錯体の合成に成功して、これらの酸化還元挙動などの電子特性や反応性を明らかにし、また、アセチル CoA 合成酵素活性中心のモデルとなるニッケル二核錯体の合成に成功して、これを用いて本酵素のモデル反応サイクルを達成するなど、従来の概念を越える独自の生物無機化学研究を展開し、金属酵素に凝縮された自然の巧みな仕組みを解明する端緒を拓きました。

平成24年度卒業・修了留学生を送る夕べを 開催



卒業・修了留学生に記念品を手渡す総長

平成24年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月6日(水)、南部食堂1階において開催されました。これは、今春、卒業・修了して、就職や帰国などで本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を願い、本学での思い出の1つとなるよう開催されたものです。留学生と、日頃お世話になっている関係諸団体、留学生関係教職員など約150名が参加しました。

初めに、濱口総長から激励及び祝福のあいさつがあり、次いで、来賓を代表して花井雅夫公益財団法人名古屋国際センター理事長から祝辞がありました。続いて、渡辺理事の発声により乾杯が行われ、有志の留学生によるはなむけの歌が披露された後、総長が名古屋大学留学生後援会からの記念品を各部局の卒業・修了代表者へ手渡しました。これに対して、2名の卒業・修了代表者が謝辞を述べました。

最後に、町田留学生センター長から閉会のあいさつがあり、盛況のうちに終了となりました。

退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催



謝辞を述べる総長

名古屋大学退職者表彰式が、3月28日(木)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

これは、平成25年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者34名のうち30名の方が出席し、濱口総長から被表彰者一人ひとりに表彰状と記念品が手渡されました。

続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことばが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職する職員をはじめとした関係者が出席しました。総長のあいさつの後、退職者を代表して出口秀典国際部国際学生交流課長から謝辞が述べられました。退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

ドイツにみる脱原発のゆくえ——環境社会学の視点から

青木 聡子
環境学研究科准教授

業税や働き口を一気に喪失することを意味しています。現に、町内に立地する原発が2011年5月に2基とも停止したビブリス (Biblis) では、2011年の地方税収入が半減しただけでなく、飲食店の廃業など副次的な影響も出始めています。ただし、こうした状況に直面した自治体がただ手をこまねているわけではありません。ビブリスでは、「将来構想プロジェクト」が行政主導で開始され (2012年6月)、8月から9月にかけて、住民約9300人と町内に事業所をおく企業を対象としたアンケート調査が実施されました。自分たちの地域を今後どのようにしていきたいかを問うこのアンケートは、行政側の予想 (10%) を大きく上回る約20%の回収率を記録しました。回答については現在集計が進んでおり、結果は自治体の今後の方針に反映されます。

それまで原発が稼働しそれによって自治体の財政が成り立っていたような地域において、原発に代わる「お財布」をどのように確保し、原子力産業のもとでの生活からいかに脱却するのかが重要な課題であり、しかも帰結のみえない進行形のイシューです。ドイツ国内の原発立地地域でそれぞれどのような対応がとられ、それによって個々の地域社会がどのような「その後」を歩むことになるのか、そこに生きる人々が自らの地域社会の「その後」とどのように向き合っていくのかについて、引き続き調査・研究を進めていく予定です。

環境社会学は、環境をめぐる課題と向き合う人々やその向き合い方を研究の対象としています。私自身は、これまで、社会運動という手段で環境問題と向き合う人々を対象に研究を進めてきました。ドイツの環境運動、なかでも原子力施設をめぐる住民／市民運動が主たるフィールドです。

ドイツでは、福島第一原発の事故を受けて原子力政策が大きく転換されました。連邦首相メルケルは、原発の稼働期間延長の停止を決定し、それまでの原発推進路線から一転して、脱原発路線へと大きく舵を切りました。2022年までに脱原発を達成することを盛り込んだ第12次改正原子力法が閣議決定され (2011年6月)、連邦参議院で承認 (同年7月) されました。

こうして脱原発が決定的となったドイツ社会ですが、それに伴って新たな課題も浮上しています。これまで原子力発電のもとで展開されてきた人々の営みの見直しであり、原発に代わるオルタナティブの模索です。ただし、ここでいうオルタナティブとはオルタナティブ・エネルギーに限りません。原子力に代わるエネルギーの供給源をいかに確保するかは、確かに重要な課題ですが、この点に関しては既に様々な分野で研究が進められています。私が着目するのは、原発立地自治体の財政基盤のオルタナティブです。

原発が立地している自治体にとって、脱原発は、原発稼働によってそれまで得ていた莫大な営



ビブリス町役場のホールにはビブリス原発 I・II の写真パネルが飾られて続けている。原子力発電所はこの地域の発展の象徴であり、自治体や住民にとって重要な存在であったことを物語っている。

(2012年9月19日、ビブリスにて執筆撮影)

アフリカでイネをつくる

浅沼 修一 農学国際教育協力研究センター教授

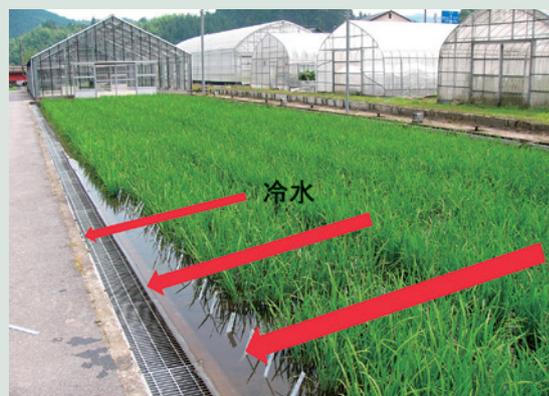
降雨（天水）に頼るケニアのイネ栽培の大きな生産阻害要因は土壌の乾燥の害と低温による冷害です。2007年頃からもち病の被害も見られるようになり、今後拡大するのではないかと懸念されています。熱帯はともすれば雨の降り方が不順ですが、土壌の乾燥が続くとイネは耐えられません。また、海拔1675mにある首都ナイロビ（1.16 S, 36.48 E）は、年平均気温の平年値が19.1℃、最も寒い7月の月平均気温が17.0℃です。イネの花粉が正常に成熟できないと発生する不稔糊（実らない糊）による減収は障害型冷害ですが、この障害は穂が出る10～15日前の平均気温が18℃以下で発生しますので、ケニアの中央高地は赤道直下の熱帯に位置するにもかかわらず、イネの冷害が問題になるのです。

陸稲はその生育を通して300～500mmの水を必要とし、陸稲ネリカ（NERICA：New Rice for Africa、アジアイネとアフリカイネの交配によって作られたイネ）は降水量が5日間20mm、1ヶ月120mmで3ヶ月連続する条件が最低必要です。また、冷害を避けるには、その3ヶ月間の最後の月平均気温が19℃以上であることが必要です。そこで、これらの条件を備える場所を稲作可能地として、ケニアの天水畑における稲作ポテンシャル把握のため稲作可能地域の分級地図を作成しました（図1）。Agro-Climatic Zone Map、Kenya General Map、Road Map of East Africa、Kenya Provinces & District Map、Vegetation & Present Land Use Map、Surface Geology and Soil Map等

の地形図と、土壌データ、衛星画像（Landsat-7/ETM+ データ、TERRA/ASTER データ、ALOS/AVNIR データおよび SPOT/Vegetation 10-days



旱魃によりイネ全株が枯死した現地調査地（2010年11月、ケニア西部）



冷水かけ流しによるイネの耐冷性評価試験（愛知県山間農業研究所）（2012年7月）

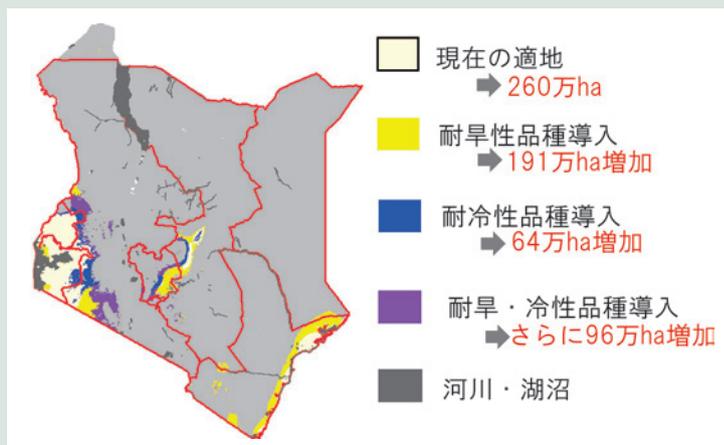


図1 ケニアの天水稲作可能性マップ

MVC NRF データ：2002年1月～12月の旬ごとの植生指数データ)、地形把握のための標高データ (DEM)、気象分布データ (WorldClim データ)、ケニアの気象観測データ (25カ所：ケニア気象局日々データを編集) を用いて作成したものです。天水での稲作可能地域の面積は260万 ha と推定され、これが、降水25%減少で栽培可能な耐旱性品種ができれば191万 ha、気温2℃低下で栽培可能な耐冷性品種ならば64万 ha、両方備える品種であればさらに96万 ha が栽培可能となり、ポテンシャルが大きく広がることが分かりました。品種育成への期待が高まるどころです。

品種育成の方向性も見えてきています。イネの耐冷性について、日本で極強と評価されている品種「はなの舞い」とネリカの親品種 WAB56-104 との交配により、両品種の耐冷性を示す量的遺伝子座 (QTL) をもつと耐冷性が高くなることがわかりました (図2)。育種によるネリカの耐冷性強化を効率的に進めていくことができます。

環境によってイネ耐旱性に必要な根系形質が異なることもわかりました。これまでの研究では、根が深くまで伸びる深根性や、堅い層を貫通する貫入力が天水畑稲作での重要な根系形質とされてきました。しかし、ケニアの農家圃場での栽培試験の結果では、これらの形質は必ずしも生産性に結びつかないことが明らかになりました。ケニアの圃場では、土壌の硬さは土壌水分の変動に伴って大きく変動し、このような環境では、水分の変動に反応して根を形成する性質、すなわち「根の可塑性」を持つ品種が重要なのです。また、耐旱性は品種だけでなく肥培管理によっても影響され

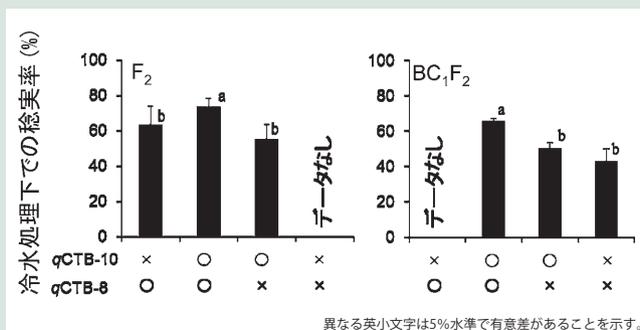


図2 はなの舞由来の耐冷性 QTL (qCTB-8) と WAB56-104 (qCTB-10) の両方を持つ個体の耐冷性が高い。

ます。耐旱性の一つの指標としての葉巻程度は耐旱性が強いほど小さい値を示します。同じくケニアでの現地試験で、リン酸肥料によって葉巻程度が小さくなることが実証されました。また、日本における制御環境下でのモデル圃場試験で、窒素肥料のイネ根系に対する影響を調べたところ、中庸の土壌水分条件下では、NERICA1の方がNERICA4より施肥量に対する根の生育反応が大きく、耐旱性がより強化される可能性が示されました。

サハラ砂漠以南のいわゆるサブサハラアフリカの国々では、都市の住人や子供たちを中心に米を食べる人が多くなってきています。東アフリカのケニアでは一年に約30万トンの米が消費され、そのうち20万トンを超える米を輸入しています。そのため、国内生産を上げることが重要な課題となっています。私たちが取り組んでいる研究は2012年度から地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) に引き継がれ、品種育成と栽培技術の開発を中心として、ケニアでイネをつくることを目指していきます。

1950年生まれ。岩手大学農学部卒業。名古屋大学大学院修了後、International Institute of Tropical Agriculture、九州東海大学農学部講師、農林水産省北海道農業試験場、九州農業試験場、国際農林水産業研究センター研究員を経て、2005年より現職。専門は土壌微生物学。現職ではアフリカの稲作研究のほか、ケニアの土壌侵食と地域文化の課題に自然科学と社会科学の研究チームを作り学際的にアプローチしている。事業報告書に「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人人材の育成に向けた我が国の取り組みの方向性」(2013年) など。

あさぬま しゅういち



平成24年度名古屋大学総長顕彰

6名3団体表彰



平成24年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月25日(月)午後4時より、豊田講堂第1会議室において行われ、6名の学生と3団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために平成15年度に創設されたものです。顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に9件の学部推薦があり、また、「正課外活動への取り組み」部門には自薦・他薦を合わせて12件の応募がありました。

これら合計21件の推薦・応募について、理事及び部局長等で構成する総長顕彰委員会における審査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で1名・3団体が受

賞しました。

授与式終了後に行われた総長と受賞学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中、総長から学生に対する将来への激励があり、また、関係教職員と受賞学生による活発な意見交換が行われました。

全体の講評

今年度で10回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募のあった学生達の取り組みは、意欲や姿勢、各活動への情熱や熱意が感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

受賞した学生・団体においては、名古屋大学の目指す「勇気ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く本学の他の学生の目標となりうる人材としてのさらなる成長を期待します。

「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
坊田 千里	教育学部人間発達科学科 4年	人間の成長と発達につながる教育のあり方に対して高い関心を持ち、学内外の学修機会に積極的に参加して活用しようという意欲は、他の学生の模範といえる。卒業後は中学校教諭として、本学で培った教育に対する探究心と研究能力を活用し、教育現場において活躍することを期待する。
鈴木 健介	経済学部経済学科4年	ひたむきに関心を追求する学修態度は、ゼミナール等において良好な環境作りに貢献している。また、本人は、仲間と共に学んでいくという姿勢を大切にしていることがうかがえる。国際交流活動を積極的に行うと共に東日本大震災被災者応援・愛知ボランティアセンターのスタッフを務めるなど学内外において厚い信望を得ている。将来は欧州経済統合と労働市場について研究を進め、経済学の分野の研究者として本学学生の範となることを期待する。
服部 景	理学部生命理学科4年	入学時に決意した目標に向かって留学に必要な英語力を急速に伸ばす等、着実な準備と努力をし、目標を達成した学習意欲とチャレンジ精神は他の学生の模範となる。マンチェスター大学で得た知識と経験を活かし、将来は国際的に活躍する科学者になることを期待する。
水谷 達志	医学部医学科6年	「よりよき医療とはなにか」を考え、多少の困難にあっても前向きに乗り越えていく学修姿勢、好奇心旺盛で積極的に情報を収集していく探求姿勢は他の学生の範となる。留学して得た知識と経験をもとに、基礎医学・臨床医学・社会医学の重なり合う領域で積極的な活躍を期待する。
浅井 崇	工学部機械・航空工学科 4年	授業を聴講するだけでなく、それぞれの授業で学んだことがらを有機的に結び付け、学問への興味をさらに高めるとともに、様々な実践の場に積極的に参画し、それらを活用している学修態度は優秀な学業成績に表れている。将来は大学で学んだ専門知識を活かして宇宙開発に貢献することを期待する。

「正課外活動への取り組み」部門

氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
人力飛行機制作 サークル AirCraft	池田 遼輔 (工学部3年)	正課外活動 (部活動等)	人力飛行機をゼロから設計・制作・飛行させることは、学修した内容を実践検証することであり、メンバーの苦勞と工夫がうかがえる。今後も、より速くより機動性の高い人力飛行機に向上させるために、大学で学んだ知識をさらに活用し、多くの人々に夢を与えることを期待する。
あかりんご隊	南 明希 (理学研究科博士 前期課程1年)	正課外活動 (その他)	内閣府男女共同参画局主催「第1回女性の活躍促進プラン学生コンペティション」で高く評価されるとともに、子どもたちに科学のおもしろさを伝える出張実験や女子中高生に向けての進路相談、理系女子学生の交流イベント開催など、若い世代や理系女子を支える活動は評価できる。女性研究者が活躍しやすい環境を整えるために今後更なる活動を期待する。
NUMAP 名古屋大学 ミュージアム活性化 プロジェクト	川本 恭平 (情報文化学部 4年)	社会への貢献活動	本学の様々な研究成果とその面白さを市民に伝える活動の実践は高く評価できる。名古屋大学博物館の展示ガイドや観察会など、独自イベントの企画・運営を通じ、今後も多くの市民に科学の面白さや研究現場を伝える活動を展開し、本学の名誉を高めるとともに社会に貢献することを期待する。
太田 貴大 (工学研究科博士 後期課程3年)		社会への貢献活動 本学への貢献活動	本学が有する自然環境の価値の高さを証明し、生物保全のための意欲的な活動は学外の専門機関からも高い評価を得ている。今後も本学の貴重な自然環境の調査を実践し、絶滅危惧種のオオコノハズクやアオバズクなどの保全活動に尽力するとともに社会に貢献することを期待する。

平成24年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

将来につながる大学での学び

坊田 千里 教育学部人間発達科学科4年



研究室での授業分析

私は、教育方法学研究室で「授業分析」を中心に学びました。卒業論文では教育実習で行った授業などを子どもたちの発言に注目して分析し、物語教材を用いた国語の授業において子どもたちが学び合い、読みを深める過程を明らかにしました。さらに、その中から考え続けてきた疑問に対する答えを導き出すことができ、自分なりに4年間の集大成として満足のいく成果となりました。

また、各地の小・中・高等学校や大学の先生方、大学院の先輩方とともに参加した研究会では自分には無い新たな視点や考え方を得ることができ、実際に学校まで足を運んで授業を見に行くと、素晴らしい実践や楽しく学び合う子どもたちと出会うこともできました。

この春からは中学校の教員になります。私が大学で学んだことは学校現場で生かせることばかりです。子どもたちが学び合える授業を行い、一人ひとりの存在を大切にできる教員となれるよう、これからも全力で頑張っていきます。

ぼうだ ちさと 1990年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

経済学者を志して

鈴木 健介 経済学部経済学科4年



Photo by Minoru Onoda

留学先のドイツフライブルグ大学にて

私は欧州経済統合による経済効果について研究を進めています。グローバル化が声高に叫ばれる昨今、国という従来の枠組みが取り払われ、社会全体が大きな転換点を迎えています。私の研究課題は、欧州の事例をもとに市場統合による効果を経済学の視点から分析することです。

本研究分野に関心を持った背景には、師匠の土井康裕先生が経済統合を専門とされていたことに加え、グローバル化を進める名古屋大学の環境で学んだことが大きな要素になっています。文化的背景を異にする学生が講義室で机を並べ、ゼミにおいて活発に意見を交わすのは日常的風景でした。また様々なプログラムによって海外で学ぶ機会も豊富にあり、私自身も最後の学期をドイツフライブルグ大学で学び、経済学の専門知識と欧州経済に関する理解を深めることができました。

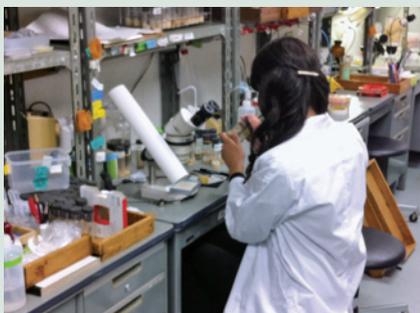
私は将来、研究者になることを志しています。4月からは大学院に進学し引き続き勉学に精進していきたいと思っています。

すずき けんすけ 1990年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

科学者という選択をくれた4年間

服部 景 理学部生命理学科4年



ショウジョウバエの生育状況を確認の様子

大学で科学を学び始めた当初、「科学をやるには世界に出なければならない」と漠然と考えていたことを覚えております。英国マンチェスター大学で1年間の卒業研究が出来るという留学プログラムに参加するために必要とされた学力、語学力を身につけるため、アルバイトの収入を短期留学に充て、大学で留学生のサポートをしながら異文化を学ぶなどの活動を行って参りました。晴れて、マンチェスター大学に留学してからは研究室の様々な国籍のメンバーたちと密接に議論を重ね、自由闊達な環境の中で、てんかんという神経疾患の原因究明とその治療開発の基礎研究を通して科学の根本を学んで参りました。

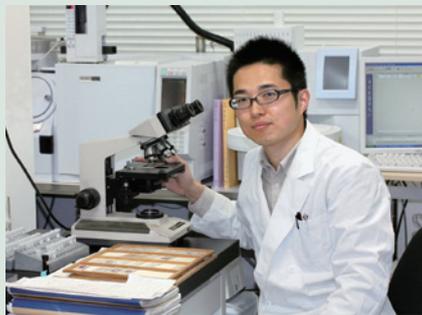
国際的に活躍する科学者になろうと決めた今、この先より多くの場所で研究経験を積み、優秀な科学者たちを輩出する研究グループを持たらという夢があります。社会が求める神経科学の発展と進化の一端を担う科学者を目指して、邁進し続けて行きます。

はっとり けい 1990年生まれ 長野県出身

「学修への取り組み」部門

医療を考える豊かな想像力を育むために

水谷 達志 医学部医学科6年



法医学教室にて論文発表準備中の筆者

この6年間は、良い医療とは何か、それをどう実践していくかを考察するために必要な知識と想像力を得られるよう、がむしゃらに過ごして参りました。

2年次より学んだ法医学講座では、国際雑誌への論文投稿に結実する研究成果を得ることができました。4年次における病理診断コンテストでの優勝を機に得た翌年夏の米国 Boston、NY での外科病理のインターンの経験を通じて、病理形態学を中心とした医学の理解を幅広く深めました。また、この経験は医療を真に幅広く考察するにはグローバルな視点も欠かせないと気づく契機ともなり、続く6年次には英国 Warwick 大学での3ヶ月間の臨床実習を経験した一方で、創刊200周年を迎えた New England Journal of Medicine のエッセーコンテストに応募して入賞を果たしたことにより記念シンポジウムに招待されるチャンスも獲得しました。

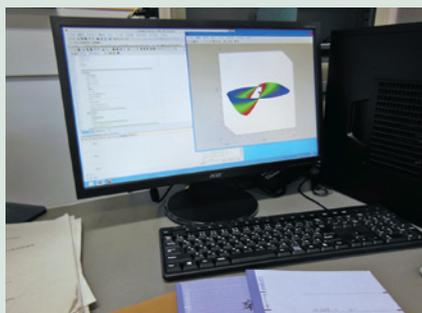
医学に対する見識や想像力を更に深めつつ良い医療とは何かを考え実践していけるよう、今後も努力して参りたく思います。

みずたに たつし 1982年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

4年間を振り返って

浅井 崇 工学部機械・航空工学科4年



連続噴射による軌道遷移をシミュレーションしている様子

私は高校時代、物理数学が得意であったので現在の工学部を志願し入学しました。当時は将来の夢が漠然としており、何を志すか決まっていませんでした。ただ、授業で学ぶことは今後役に立つはずだと思い、懸命に勉強していました。

転機となったのは、大学での宇宙ステーション補給機 HTV に関する集中講義でした。この授業を受けて宇宙事業の広大さ、面白さを知り、自分も宇宙事業に加わって働きたいという思いが生まれました。それからは今まで以上に勉学に励むようになり、宇宙工学を学ぶため、現在は山田克彦教授の研究室のもとで宇宙機の軌道に関する研究を行っています。

大学院入学後は、より宇宙機に関する知識を広げるために軌道の研究のみならず、宇宙機の姿勢制御等も学びたいと考えています。

まだまだ学ぶことはたくさんありますが、今の夢を実現できるよう努力していきます。

あさい たかし 1990年生まれ 岐阜県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（部活動等）

鳥人間コンテストへの挑戦

えあくらふと
人力飛行機製作サークル AirCRAFT

池田 遼輔 工学部機械・航空工学科3年



飛行試験の様子

私達「人力飛行機製作サークル AirCRAFT」は、2012年開催の35回鳥人間コンテストタイムトライアル部門で初優勝を成し遂げました。この部門は2006年に新設された部門で、スタートラインから500m先のポールをUターンして再びラインに戻ってくるまでのタイムを競う部門です。従来の飛行距離を競うデスタンス部門とは異なり、機体の速度と旋回時の操縦技術が勝利の鍵となります。

他のライバルチームが時速30km/h前後の機体設計をするなか40km/h以上出せる機体を設計し、高速化に伴う負荷の増大に耐えるパイロットの体力をトレーニングによってつけたことが今回の結果につながったと思います。

今後の目標として、鳥人間コンテストの連覇および国際航空連盟（FAI）規定に基づく閉回路飛行速度記録への挑戦が挙げられます。これらの目標実現のため空力、構造両面をさらに進化させた機体の開発と機体を運営するチーム力のさらなる向上を目指して行きたいと思っています。

いけだ りょうすけ 1991年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（その他）

男性も女性もともに輝ける未来をめざして

あかりんご隊

南 明希 理学研究科生命理学専攻
博士課程前期課程1年



女性の活躍促進プラン学生コンペティションの様子

グローバル化が進み、ヒトやモノが国や地域の境界を越えて行き交う現代社会において、日本が高い競争力を維持していくためには、新たな創造性を備えた女性リーダーの活躍が必要不可欠だと私たちあかりんご隊は考えています。

あかりんご隊は名古屋大学の理系女子学生から成るコミュニティで、理系社会の中ではマイノリティになりがちな女子の活躍を応援する、という目的で結成されました。私たちは普段、子ども向けの出張実験を行ったり、理系進学を考える女子中高生を対象としたセミナーを開催したりと様々な活動を展開しています。

昨年は内閣府主催の女性の活躍促進プラン学生コンペティションに参加し、女性の活躍が促進されるためには、男性も含めた周囲の理解と協力が何よりも重要であると強く認識しました。今後は男性も女性もともに輝ける環境づくりを目標に、議論する場の提供や情報発信に更に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

みなみ あき 1989年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会への貢献活動

科学を通じた市民と大学の橋渡しを目指して

にゅーまっぷ
NUMAP

川本 恭平 情報文化学部自然情報学科4年



日食グラスで太陽を見る参加者の様子

NUMAPは市民が科学や大学の研究と触れ合い、身近なものと感じてもらおうことを目指した実践に2007年より取り組んでいます。

今年度最大の取り組みは5月に実施した金環日食の観望会です。本学の研究紹介や公開実験など特色ある実践となりました。市民の関心は非常に高く、参加者は400人にのぼりました。もうひとつの大きな取り組みは、考古資料や赤外線など幅広い題材を扱う体験型展示の制作・活用による科学教育の実践です。受動的に眺めるのではなく、能動的に触れ、活用できる展示の作成・出展を行ってきました。

近年、科学予算のありかたや先端科学への市民の不信感が高まっていると感じています。大学・学生と市民との間に新たな関係を構築するためには、学生によるこうした科学コミュニケーション活動が重要な役割を占めると考えています。総合大学である本学のさまざまな資源を生かしながら、今後もより活発な活動を目指していきます。

かわもと きょうへい 1990年生まれ 広島県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会への貢献活動・本学への貢献活動

名古屋大学の貴重な自然環境を守るために

太田 貴大 工学研究科社会基盤工学専攻
博士課程後期課程3年



大学内で捕獲されたフクロウの仲間のオオコノハズク（愛知県の準絶滅危惧）

「名古屋大学には、貴重な野生生物が住んでいます。彼らを支えられる豊かな自然環境は大学だけのものではなく、将来世代を含む名古屋市民のものでもあります。私達大学関係者は、この一員として、大学内の自然環境の破壊を回避して適切に維持・管理していく責任を持っています。」

これが、大学内外の多様な方々との協働を通じて実施してきた、3年間の地道な野生生物調査の結果、たどり着いた提言です。

2012年度、調査地近くの森林が伐採されて研究施設や倉庫が建ちました。大学の更なる発展のためにはより充実した研究棟が必要です。しかし、それによって失われている生き物や生き物に関わる人達の気持ちがあることを、全ての大学関係者が心に留めておく必要があると思います。今後は、調査で得られた情報が様々な場面で活用されるよう情報発信にも努めていきたいと思っています。身近な自然環境の価値の高さを知った上で下す決定が、自然環境を守る方向に向かうことを期待しています。

おおた たかひろ 1984年生まれ 愛知県出身

臨床研究中核拠点及びトランスレーショナル・リサーチ拠点開設 記念式典を挙げる

●医学部附属病院

医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センターは、2月16日(土)、同院中央診療棟3階講堂において、臨床研究中核拠点及びトランスレーショナル・リサーチ拠点開設記念式典を挙りました。

同式典は、同院が厚生労働省の「臨床研究中核病院」、及び文部科学省の「橋渡し研究(トランスレーショナル・リサーチ)加速ネットワークプログラム」に採択されたことを記念して開催されたものです。今後は、同センターを中心に、基礎研究の優れた成果を臨床研究及び治験に橋渡しするための拠点として、国際水準の質の高いトランスレーショナル・リサーチを推進していくこととなります。

開会に伴い、主催者側から松尾医学部附属病院長、濱口総長、高橋医学系研究科長があいさつを行った後、吉田大輔文部科学省研究振興局長、原 徳壽厚生労働省医政局長、猿田享男慶應義塾大学名誉教授をはじめ5名の来賓よりあいさつがありました。次いで、直江同センター長よりセンターの概要と具体的な活動内容の説明がありました。

引き続き行われた記念講演会では、まず、松尾病院長が「名大病院におけるトランスレーショナル・リサーチのあゆみ」と題し、1990年代後半より始まった同センターの基盤活動の歴史的経緯を報告しました。その後、板倉康洋文部科学省研究振興局ライフサイエンス課長が「トランスレーショナル・リサーチに対する文部科学省の取組について」、山田雅信厚生労働省医政局研究開発振興課治験推進室長が「臨床研究中核病院の整備と今後の展望」、



開会のあいさつをする松尾病院長

小林史明株式会社CTD代表取締役社長が「医師主導臨床研究の行方」、福島雅典先端医療振興財団臨床研究情報センター長が「University Hospital Alliance for Life Science Innovation & Global Network(ライフサイエンスイノベーションとグローバルネットワークに向けた大学病院連携)」、近藤達也独立行政法人医薬品医療機器総合機構理事長が「レギュラトリーサイエンスの今後」と題し、講演を行いました。いずれも、今後の日本や世界の医学研究の動向を見据えた示唆に富む内容で、聴衆は多くの情報を得ることができたようでした。最後に、祖父江 元同研究科教授より閉会のあいさつがあり、その後、希望者はセンターの施設を見学しました。

同センターは、文部科学省の指導のもとトランスレーショナル・リサーチの推進を目的として2002年に同院内に設置した遺伝子・再生医療センターと、治験推進を目的として1999年に設立した治験管理センターを母体とし、2003年に設置した臨床研究推進センターを統合して、2010年6月に設立されました。トランスレーショナル・リサーチから治験に至る先端・先進医療開発を一元的に捉えることのできる組織として発足し、医薬品の臨床試験の実施の基準(GCP)に準拠した先端・先進医療開発を実施することを目的としています。医学部附属病院は、今回の2件の採択により、画期的な医薬品・医療機器等を効率的かつ効果的に国民へ還元し、また、日本発の革新的な医薬品・医療機器を創出し、国際水準の臨床研究等の中心的役割を担う拠点として、今後ますますの活躍が期待されます。

なお吉田局長は、記念式典に出席した後、東山キャンパスに移動し、世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)に採択されたトランスフォーマティブ生命分子研究所を視察しました。



会場の様子

クリニカルシミュレーションセンター開設記念式典を挙

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、3月9日(土)、医学部附属病院中央診療棟講堂において、同研究科附属クリニカルシミュレーションセンター開設記念式典を挙

同センターは、蘇生技能訓練のための設備や医療面接及び身体診察のトレーニング室を備えた既設の「スキルス&IT ラボラトリー」に、最新鋭の外科診断・治療分野を中



シミュレーターの説明を受ける様子

心とした数多くのシミュレーター、トレーニングマシンが導入されたことに伴い、専任教員を2名配置して、4月より新たに発足しました。同院職員はもちろんのこと、地域医療機関と連携して、地域医療に携わる医療職の臨床能力の向上、専門医の育成、研修医教育及び生涯教育に貢献することを理念としています。

学内より11名、学外より82名が参加した式典は、濱口総長のあいさつで始まり、次いで高橋医学系研究科長、松尾医学部附属病院長のあいさつの後、来賓の加藤欽一愛知県健康福祉部健康担当局長から祝辞がありました。続く記念講演会では、高橋優三前岐阜大学医学教育開発研究センター長より、「シミュレーション医科大学という考え方」と題して、シミュレーション教育の歴史及び重要性について熱のこもった講演が行われました。

講演会終了後は、中央診療棟講堂及び同棟数カ所において内覧会を行い、最新鋭のシミュレーターを中心に、担当医師や医学教育機器メーカー担当者が機能や使用方法について実演しながら詳細に説明し、参加者は熱心に耳を傾けていました。

動物慰霊祭を挙

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、3月14日(木)、実験動物供養碑前において、動物慰霊祭を挙

これは、医学の教育研究の発展に貢献した動物を慰霊するため行われたもので、春の晴天ながら寒風の吹く中、高橋医学系研究科長をはじめ、教職員、学生ら148名が参列し、実験動物の冥福を祈りました。



献花の様子

最初に、医学研究のために尊い生命を捧げた多くの実験動物に対して、感謝の意を込めて1分間の黙祷が行われました。次いで、高橋研究科長より「実験動物の医学研究への貢献に対し感謝の意を捧げるとともに、動物福祉の観点から適正な動物実験の実施に留意して、医学医療の進歩・発展のために一層努力する」と慰霊のことばが述べられました。

続いて、参列者が実験動物供養碑に献花し、最後に、門松同研究科附属医学教育研究支援センター実験動物部門長があいさつを行い、閉式しました。

国際シンポジウムを開催

●大学院国際開発研究科、大学院法学研究科、大学院経済学研究科、法政国際教育協力研究センター、農学国際教育協力研究センター

大学院国際開発研究科、大学院法学研究科、大学院経済学研究科、法政国際教育協力研究センター、農学国際教育協力研究センターは、3月11日(月)、経済学部第2講義室において、ASEAN地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラムの国際シンポジウム及び第1回運営委員会を開催しました。

同プログラムは、政府開発援助国際化拠点整備事業費補



記念撮影

助金による「大学の世界展開力強化事業」に採択され、平成24年度より5年間、ASEAN諸国の7大学との間で、学生約200名を長期(約半年)あるいは短期(1~2週間)で派遣・受入れして交流させるという意欲的なもので、既に一部交流を開始しています。

今回は、シンガポール国立大学、タイのチュラロンコン大学、フィリピン大学ロスバニョス校、インドネシアのジャ・マダ大学、ベトナムのホーチミン市法科大学及びハノイ法科大学、カンボジアの王立法経大学の代表者11名が参加し、次世代リーダーの養成に関し、議論しました。

同プログラムは、留学生の受入れだけでなく派遣についても積極的にケアするなど双方向の学生交流を行い、また人材育成の場を大学内に限定せずに企業や国際機関にまで広げ、インターンシップなどを通じて高度なコミュニケーション能力を有したリーダーの育成を目指す点において特徴的であり、高い成果が求められます。シンポジウムに先立って行われた評価・質保証委員会では、運営委員会とともに国連地域開発センターと中部の業界団体により推薦された外部評価委員を招き、プログラム運営における教育の質の保証について真剣な議論が行われました。

国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、3月11日(月)、12日(火)の2日間、文系総合館において、国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」を開催しました。これは、同研究科の教員を核とする学際的・国際的研究グループによる、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討」の締めくくりとして、開催されたものです。



講演するラリュ教授

初日は、田所光男国際言語文化研究科教授が、同グループが構築してきた新しい総合科学「比較マイノリティ学」の今後の方向性について説明を行い、その後、招待講演として、マルク・コベール パリ第13大学准教授が「シュールリアリストーグローバル化された世界におけるマイノリティ行動ー」、ハスエリドン内モンゴル大学准教授が「中国における民族教育の行方ー少数民族に対するバイリンガル教育政策の理念と実践をめぐってー」と題し、それぞれ講演しました。

2日目は、アンヌ・ラリュ パリ第13大学教授が「Hリスト：ダナ・ハラウェイとSF文学の政治」、ウォン・ガンリン マラヤ大学上級講師が「マレーシア・インド人のアイデンティティ」と題して招待講演を行ったほか、柴田哲雄愛知学院大学准教授が「国家的危機における優生学ー永井潜と潘光旦ー」について講演しました。

両日ともに、博士課程後期課程の学生の研究発表も行われ、藤井たぎる同研究科教授、長畑明利同教授を中心として、マイノリティ状況から新たな共生を模索するという21世紀世界の切実な課題について、熱心な討議が行われました。

「現代の日本社会と青年の自殺問題について考えるセミナー」を開催

●総合保健体育科学センター

総合保健体育科学センターは、2月18日(月)、ES総合館 ES会議室において、「現代の日本社会と青年の自殺問題について考えるセミナー」を開催しました。

我が国の自殺死亡率は男女ともに主要国の中でも高く、青年(30歳未満)自殺者数の推移をみても、青年の自殺というのは深刻な問題です。セミナーでは、古橋忠晃総合保健体育科学センター助教が全体の司会を務め、初めに、



セミナーの様子

杉山理事があいさつを行い、続いて、阪本俊生南山大学経済学部教授が「現代の日本における自殺と社会についてー社会学の古典の見方からー」というタイトルで講演しました。阪本教授は、様々な統計的データを元に、現代の日本の自殺問題について、失業や雇用の不安定化などの経済的要因や、家庭の崩壊あるいは不安定化などの社会関係的要因よりも、さらに第3要因、つまり制度的・規範的要因に注目することが重要であり、これは現代において「男性」が危機に陥っていることと関係があると指摘しました。

次いで、鈴木國文医学系研究科教授により「社会の変化と精神の病理ーこの30年を振り返ってー」と題して、指定討論が行われました。阪本教授が自殺という現象の奥に見た「社会」に関連して、鈴木教授が社会変化とともに精神の病理がどう変化したのか、さらに「青年」という概念が現在どのように変化したのかについて、論じました。その後討論会が行われ、講演者や参加者との間で充実した議論が行われました。

学内の関連領域の教員や大学院生のほか、学内及び近隣大学のメンタルヘルスや保健管理に従事するスタッフなど約40名の参加者がありました。

大学教育改革フォーラム in 東海2013を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月2日(土)、ES総合館及び附属図書館において、大学教育改革フォーラム in 東海2013を開催しました。

同フォーラムは、東海地域を中心として、大学教育のあり方について、教員、職員、学生が活発に意見交換し相互交流することを目的として開催しており、8回目となった



ポスター発表の様子

今回は、口頭発表26件、ポスター発表32件が行われ、参加者は昨年の237名から大幅に増え、397名となりました。

初めに山本理事が開会のあいさつを行い、続いて、川島啓二国立教育政策研究所総括研究官による基調講演「学生の主体的学びをどう促すか」が行われました。口頭発表の各部会は、大学職員の学びと実践、融合的・総合的な理系教養教育の可能性、協同学習の場としての大学図書館、教務の実践的知識の共有、大学経営と評価、教養・基礎教育の設計、課題解決型学習の可能性、学生・学習支援の現在、日本の大学におけるIRの実践とノウハウの9つで構成され、活発な議論が交わされました。ランチタイムには、物理学講義実験研究会によるミニワークショップ「物理現象と概念を結ぶー講義実験という挑戦」も開催されました。

情報交換会では、参加者の投票による優秀ポスター賞5件の表彰と、愛知県立大学教職員によるダンスパフォーマンスの披露があり、聴衆から盛大な拍手が送られました。

同センターは、同フォーラムを継続・発展させ、東海地域の大学全体のさらなる活性化を目指します。

第15回 AMS シンポジウムを開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、3月9日(土)、10日(日)の2日間、環境総合館レクチャーホールにおいて、第15回 AMS (accelerator mass spectrometry: 加速器質量分析) シンポジウムを開催しました。

同センターは、国内の AMS 法による放射性炭素年代測定施設の1つとして学術研究や教育に貢献し、貴重な研



研究発表の様子

究成果を国内外に発信するとともに教育成果をあげています。今回は、国内の AMS 施設に関わっている研究者及び学生が本学に集い、装置の改良、施設の維持・管理に関わる諸問題や応用研究の成果について口頭発表19件、ポスター発表9件を行い、情報交換しました。

特別講演として、北川浩之環境学研究科教授が、「高精度炭素14年代測定とその応用」と題して放射性炭素年代測定の高精度化に向けての取り組みを紹介し、現時点での限界と将来さらに高精度化が達成された際に見えてくるものについて、踏み込んで議論しました。また、中塚 武同研究科教授は「過去2千年間の日本産のあらゆる木材を対象にした年輪セルロース酸素同位体比クロノロジーの確立」と題して、樹木年輪の酸素同位体比を基にした年輪年代解析の実現や、酸素同位体比を用いる環境変動と歴史イベントの関連づけに関する研究を紹介しました。

シンポジウムには、研究者、学生及び一般の方など合わせて58名の参加があり、活発な質疑応答、意見交換が行われ大変盛り上がりしました。8月にシンポジウムの報告書が出版される予定です。

合同シンポジウム「東日本大震災の自治体対応」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、3月2日(土)、IB 電子情報館において、日本災害情報学会との共催で、合同シンポジウム「東日本大震災の自治体対応」を開催しました。

初めに、佐藤健一前気仙沼危機管理課長が基調講演を行い、「東日本大震災時の気仙沼の危機対応」と題して、震災時の対応や事前対策の詳細について説明しました。次



基調講演を行う佐藤氏

に、日本災害情報学会東日本大震災調査団の報告として、関谷直也東洋大学准教授、磯打千雅子香川大学特命准教授、セコム IS 研究所の三島和子氏、廣井 悠減災連携研究センター准教授が、東日本大震災時の自治体対応について、質問紙調査・ヒアリング調査をもとにした報告を行いました。

最後に、福和同センター長、北川 尚高知県危機管理部副部長を加え、南海トラフ巨大地震が危惧される中で自治体はどのような対応をすべきか、また、東日本大震災の教訓からどのように学ぶべきかについて、パネルディスカッションが行われました。三陸地域は地震防災・津波に関する備えをこれまで継続的に行っており、また東日本大震災時に自治体は出来る限りの対応をしていたにもかかわらず、約2万人の方が亡くなった、もしくは行方不明になってしまったという事実は、今後の中京圏の防災対策を考える上で重く受け止めなくてはならないとの結論が導かれました。

約100名が参加し、会場からも、自治体による防災啓発の注意点などについて、活発な質疑応答が行われました。

国際研究会「ゼロ度における高エネルギー散乱」を開催

●グローバル COE プログラム「宇宙基礎原理の探究」、素粒子宇宙起源研究機構

グローバル COE プログラム「宇宙基礎原理の探究」及び素粒子宇宙起源研究機構は、3月2日(土)、3日(日)の2日間、ES 総合館において、国際研究会「ゼロ度における高エネルギー散乱」(HESZ2013)を開催しました。

同研究会における「ゼロ度」とは、温度のことではなく、素粒子同士が衝突して散乱された方向が元の進行方向



研究会の様子

と同じである事を意味します。最も基本的な散乱過程ではありますが、同時に理論計算が非常に難しい現象でもあります。

研究会には、LHC 加速器で活躍する高エネルギー物理研究者や、RHIC 加速器で活躍する原子核衝突や偏極衝突の研究者、宇宙線が大気に衝突して作る「空気シャワー」の専門家ら、異なる分野の約50名が参加し、活発な議論が行われました。LHC 実験の成功から、欧州では加速器と宇宙線をつなぐ研究会が多く開催されていますが、国内では初めての試みでした。

初日はそれぞれの分野からゼロ度における散乱の意義について紹介があり、2日目はその理論的背景及び最新の実験結果が発表され、最終日には計算技法や将来の実験計画が紹介されました。一見、限定的なテーマの研究会のようですが、広い分野の研究者が興味を持っており、参加者からは「非常に面白い研究会だった」という意見が多く聞かれました。最後に行われたサマリー講演でも、研究会をぜひ続けたい旨話がありました。

拠点国際会議を開催

●グローバル COE プログラム「宇宙基礎原理の探究」

グローバル COE プログラム「宇宙基礎原理の探究」は、3月8日(金)から10日(日)までの3日間、岐阜市内のホテルにおいて、拠点国際会議を開催しました。

平成18年に始まった同プログラムは、大学院理学研究科及び太陽地球環境研究所をはじめ、大学院多元数理科学研究科、大学院環境学研究科が共同して、素粒子から太陽系、さらには宇宙全体に至るまで、分野の垣根を越えて新たな



集合写真

連携を構築してきました。今回の国際会議は、その最後を締めくくるもので、学内外から100名を超える参加がありました。

初日と2日目は、同プログラムのキーワードである「分野横断」研究を牽引してきた特任教員や博士研究員が研究成果を発表し、その後、宇宙論・素粒子論、素粒子実験・宇宙実験・ものづくり、宇宙物理・惑星物理の3つのセッションに分かれ、活発に議論が行われました。また、参加学生全員によるポスターセッションも行われ、活発な議論が続きました。

最終日は、5年間の同プログラムの歩みと実績を振り返った後、今年度より始まった博士課程教育リーディングプログラム「フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム」の紹介が行われました。また並行して国際アドバイザーボードも開催され、アドバイザーからは、中間評価において数物系グローバル COE プログラムの中で上位2位に選ばれた「宇宙基礎原理の探究」の成果が高く評価されるとともに、「フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム」への期待と、これまで培われた良い経験を積極的に受け継ぎ発展させていって欲しいとの声が寄せられました。

シンポジウム「多様な性と生を考える」を開催

●大学院医学系研究科



シンポジウムの様子（右端が鈴木教授）

大学院医学系研究科は、3月15日(金)、大幸キャンパス東館において、シンポジウム「多様な性と生を考える」を開催しました。これは、鈴木和代医学系研究科看護学専攻教授が3月末で退職となることを記念し、鈴木教授が情熱を注いできた性教育活動の集大成として、一人ひとりの性のあり方を尊重し、すべての人が生きやすい世の中を目指すことを意図して開催されたものです。

まず、鈴木教授から、人間にとっての性、性の心理的・社会的側面、LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー) などについて、基本的な講義がありました。続いて医学部保健学科4年の杜翊寧さんが、自身の卒業研究を中心に、LGBTの人々への看護について提言しました。次に、風間孝中京大学国際教養学部教授から、どのようにしてマジョリティとマイノリティが生まれるのか、社会学的見地から講義がありました。

120名あまりの参加者があり、活発な質疑応答が行われました。

ICCAE 第5回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演するサンギンガ所長

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、2月20日(水)、農学部第7講義室において、2012年度第5回オープンセミナーを開催しました。

今回は、国際熱帯農業研究所 (IITA) のウテランヤ・サンギンガ新所長をナイジェリアから招き、「アフリカの農業研究の発展に対する IITA の役割」と題して、IITA の新たな研究方針について講演が行われました。

サンギンガ所長は、農業の現場でインパクトを示せる研究が大事で、そのために、研究体制を改革し、良きパートナーを得て、本当に必要な研究を行いたいと語り、生産量に限界がある有機農業と化学肥料の効果的利用、キャッサバ、ヤム、カウピーなど他にはない作物のジーンバンクの機能強化と世界における共有、研究成果を活かした企業化などといった新しい方向性を示しました。また、日本人の学生や研究者の育成のため大学と協力したいとの強い希望と期待を示しました。

ICCAE 第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演する前川客員教授

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、2月26日(火)、農学部B館において、2012年度第6回オープンセミナーを開催しました。

今回は、岡山大学資源植物科学研究所教授である前川雅彦 ICCAE 客員教授が「アフリカイネ野生種“*Oryza longistaminata*”の特性と利用」と題し、講演しました。アフリカに自生する野生イネは、大きな葯や旺盛なバイオマスといった有用農業形質を有していますが、交雑不稔性や雑種不稔性が強く、育種への利用が困難だと言われています。前川客員教授は、アジアの栽培イネとアフリカの野生イネ間の交雑を成功させ、耐冷性や低肥条件適応性に関わる遺伝解析を行ってきました。特に、21世紀の農業にとって重要な課題である、低投入かつ持続可能な稲作の構築に必要な低肥条件適応品種の開発を中心に、これまでの研究成果が紹介されました。

活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに終了しました。

第87回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する津久井弁護士

減災連携研究センターは、2月26日(火)、環境総合館において、第87回防災アカデミーを開催しました。

今回は、津久井 進芦屋西宮市民法律事務所弁護士が「大災害と法～法制度の壁と、被災者救済の制度～」と題し、講演を行いました。津久井弁護士からは、初めに災害対応に果たす法の役割の説明があり、その後、災害関連法の歴史的経緯から新たな法制試案まで詳しく話がありました。特に災害救助法については、東日本大震災の具体的事例から、その硬直性がしばしば問題となることを紹介しました。この点で津久井弁護士は、災害救助法は人命最優先の原則、柔軟性の原則、生活再建継承の原則、救助費国庫負担の原則、自治体基本責務の原則、被災者中心の原則という6原則を踏まえた新しい運用がなされるべきであると主張しました。

71名の参加があり、被災者支援のあり方などについて活発な質疑応答が行われました。

第88回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する平野氏

減災連携研究センターは、3月13日(水)、環境総合館において、第88回防災アカデミーを開催しました。

今回は、平野 茂株式会社一条工務店特建設計部次長による講演「木の家は災害に弱い!?」が行われました。平野次長からは、初めに、建築基準の歴史について紹介があり、続いて伊勢湾台風から東日本大震災までの自然災害による被害概要が説明されました。また効果的と考えられる震災対策について火災、揺れ、地盤災害からシロアリに至るまで詳しい説明がありました。特に戸建て住宅の免震については、最新の技術から費用やメンテナンスに至るまで、実験の結果を示しながらその有効性について紹介しました。

110名の参加があり、近年の建築物の断熱効果や住宅火災時の煙に関する危険性などについて活発な質疑応答が行われました。

「ゆかり交流ラウンジ」開所式を挙行

●附属図書館



除幕する伊藤代表幹事(左)と佐野館長(右)

附属図書館は、2月28日(木)、同館3階において「ゆかり交流ラウンジ」の開所式を行いました。

ゆかり交流ラウンジは、本学の卒業生や本学にゆかりのある著名人の著書を収集し、その業績、活躍を広く紹介する「全学同窓会文庫 名大ゆかりコレクション」を中心とした、全学同窓生、学生、教職員、一般市民の方の交流の場となる談話スペースです。同コレクションの整備にあたっては、名古屋大学全学同窓会からの助成を受け、歴代総長の著作、小説及び漫画など162冊を購入しました。

開所式では、初めに佐野附属図書館長が式辞を述べた後、伊藤義人全学同窓会代表幹事から、ゆかり交流ラウンジへの期待を込めたあいさつがありました。

同館は、今後、資料の購入や同窓生からの寄贈等により同コレクションの蔵書の充実を図ることにしています。

第28回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



講演する大井田准教授

附属図書館は、3月5日(火)、同館5階多目的室において、第28回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、大井田晴彦文学研究科准教授による、「うつほ物語の世界－平安朝の人間喜劇－」と題した講演が行われ、学内外から28名の参加がありました。

講演では、まず、日本最古の長篇物語である「うつほ物語」の成立及び文学史的な意義や物語全20巻の流れについて説明がありました。その上で、各巻における登場人物に関する文章を中心に、登場人物の略系図を交えて物語の要点が解説されました。

参加者からは、「各々の情景を想像できて、当時の宮廷文化が垣間見えた」、「是非うつほ物語を読んでみたい」などの感想が寄せられました。

また、今回は同館に所蔵する古典籍への関心を高めるため、会場内でうつほ物語と関連する古典籍の展示を行い、参加者から好評を得ました。

第26回博物館企画展「ボタニカルアートと明治の博物画」を開催

●博物館



ギャラリートークの様子

博物館は、2月9日(土)から3月9日(土)までの間、第26回博物館企画展「ボタニカルアートと明治の博物画」を開催しました。

今回は、野外観察園の植物を中心とした植物細密画(ボタニカルアート)154点と奈良坂源一郎氏の博物画「蟲魚圖譜」より21点を公開しました。展示作品は、自然をつぶさに観察し記録することが、科学にも芸術にも共通する基礎であると感じさせるもので、来館者からは「植物の細密さにおどろいた。書き手の植物に対する思いが伝わる」といった感想が寄せられました。来館者は計3,234名にもものほり、図鑑形式の図録「野外観察園ハンドブック」(500円)も435冊を有償配布することができました。

また会期中には、彫刻家の絹谷幸太氏による特別講演会「彫刻と自然」をはじめとし、関連イベントとしてギャラリートークや体験講座、コンサートを開催し、いずれも盛況でした。

第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催

●博物館



三田石材の採石場において鉱物を探す様子

博物館は、2月23日(土)、24日(日)の2日間、第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催しました。今年度4回目となる今回は、130名以上の応募者から抽選で選ばれた小中学生とその保護者計33名が参加しました。

1日目は、共催している名古屋市科学館において、鉱物の観察を行いました。まず、「鉱物とは何か」、「どのように見分けるのか」について講義があった後、実際の鉱物標本を用い、結晶形や硬度、磁性などの属性を調べて特徴を把握し、最後に鉱物鑑定試験を行いました。

2日目は、西尾市にある三田石材株式会社の採石場において、許可のもと、鉱物採集を行いました。参加者は、1日目の座学で養った鑑定眼を用いて自分で鉱物を探しました。次に、蒲郡市にある生命の海科学館へ移動し、採集されたザクロ石や電気石などを用いてオブジェを行い、自らが発見した小さな自然美をさらに深く観察・体験しました。

第48回博物館コンサートを開催

●博物館



会場の様子

博物館は、2月16日(土)、同館展示室において、第48回名古屋大学博物館コンサート「悠久のインドクラシック音楽～サントゥール&タブラ～」を開催しました。今回は、喜多郎氏作曲の「シルクロード」をはじめとする全4曲が演奏され、225名の聴衆が集まりました。

インドクラシック音楽は、インドの王族が音楽を奨励し、宮廷音楽として発展しました。安藤真也氏が担当したサントゥールはピアノの原型ともいわれる楽器で、木製ボディに貼られた約100本の弦をばちで叩き演奏します。原口 順氏が担当したタブラは、高音と低音の2つの太鼓を指や手のひらを使い演奏します。サントゥールが旋律を、タブラがリズムを奏で、ゆったりとした音から次第にテンポが上がる迫力の展開と何回も繰り返される旋律が、聴衆を魅了しました。

演奏が終わってからも演奏者が取り囲まれ、楽器の由来や構造、演奏の方法などの質問が後を絶ちませんでした。

第49回博物館コンサートを開催

●博物館



演奏の様子

博物館は、3月9日(土)、同館展示室において、第49回名古屋大学博物館コンサート「愛と自然のバロック音楽～イギリス、フランスの香り～」を開催しました。

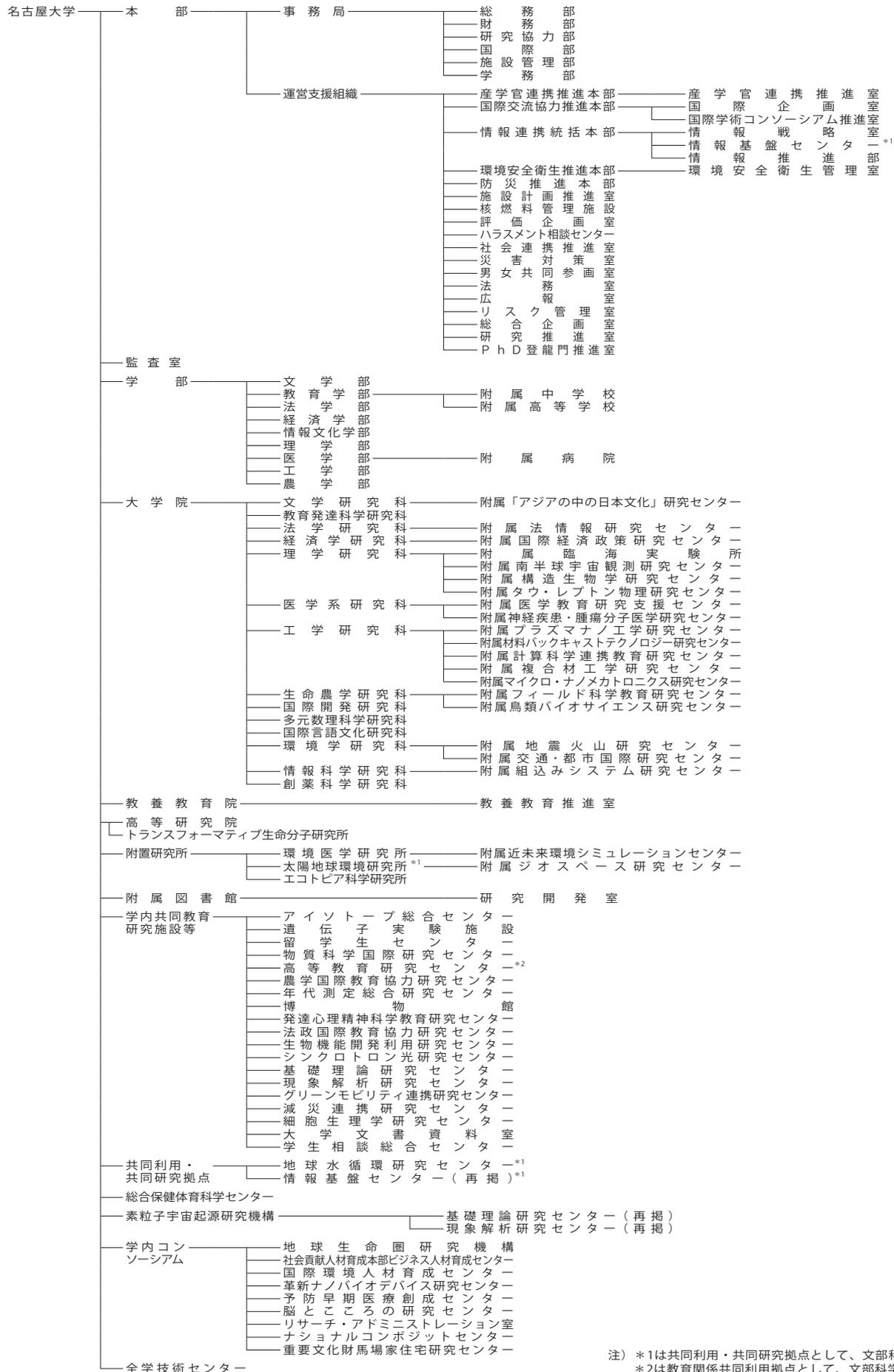
今回は、ソプラノ歌手の加藤佳代子氏、チェンバロ奏者の杉浦道子氏によって、ミシェル・ランベール作曲の「あなたは私の目をご存じないのですか」をはじめとする全10曲の独唱、演奏がありました。アンプを通さない生の歌声や演奏は、集まった聴衆をバロック世界に引きこみ、220名の聴衆は、心の奥に響く心地の良い歌声と演奏に酔いしれました。

同館は、昭和44年に谷口吉郎氏の設計により建築された建物で、演奏会場となる展示室は、吹き抜けの大きな空間と印象的な折板屋根により良く響いて適度な残響があり、毎回、演奏者からもコンサート向きとの好評を得ています。

今回は、「爽やかな風にのって～ミュージックベルの調べ」を4月27日(土)午後2時より開催します。

平成25年度名古屋大学組織図

平成25年 4月 1日



注) *1は共同利用・共同研究拠点として、文部科学省より認定
 *2は教育関係共同利用拠点として、文部科学省より認定

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 2.17	第26回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会若手研究奨励賞	大学院医学系研究科寄附講座助教	清野 祐介	
H24. 2.25	第27回欧州泌尿器科学会ベストポスター賞	医学部附属病院医員	高井 峻	
H24. 5.21	第107回米国泌尿器科学会ベストポスター賞	医学部附属病院助教	舟橋 康人	
H24. 9.30	Young Investigator Abstract Competition Honorable Mention, 48th Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes	大学院医学系研究科寄附講座助教	清野 祐介	
H24.10.31	日本学術振興会科学研究費助成事業審査委員表彰	大学院医学系研究科教授	近藤 高明	
H24.11.15	2012年度海岸工学論文奨励賞	高等研究院特任講師	中村 友昭	
H24.11.21	日本低温医学会2012年コルパン賞金賞	大学院医学系研究科教授	磯田 治夫	
H24.11.30	Best Poster Award, The 11th Pacific Rim Bio-Based Composites Symposium (BIOCOMP2012)	大学院生命農学研究科研究員	小堀 光	土川 寛 (大学院生命農学研究科教授)、 稲垣哲也 (大学院生命農学研究科助教) と連名
H24.12.11	Outstanding Paper Award, IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management (IEEM 2012)	大学院工学研究科准教授	今堀 慎治	酒井翔平 (大学院工学研究科 M2) と連名
H24.12.11	BCSJ Award, Selected Paper	大学院情報科学研究科研究員	小谷野哲之	岡本拓也 (大学院情報科学研究科研究員)、 山本典史 (大学院情報科学研究科助教)、 長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H24.12.15	第85回日本生化学会大会鈴木紘一メモリアル賞	PhD登龍門推進室特任講師	河内 美樹	
H24.12.16	Best Poster Award, International Symposium Quarks to Universe in Computational Science (QUCS 2012)	基礎理論研究センター准教授	青木 保道	青山龍美 (基礎理論研究センター特任准教授)、 倉知昌史 (基礎理論研究センター特任助教)、 益川敏英 (素粒子宇宙起源研究機構特別教授)、 他6名と連名
H24.12.27	中部経済産業局功労者感謝状	大学院経済学研究科教授	西村 眞	
H25. 1. 5	応用物理学会東海支部 第7回応用物理学会東海支部貢献賞	大学院工学研究科教授	堀 勝	
H25. 1.10	第17回 日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 功績賞	大学院工学研究科教授	田中 英一	
H25. 1.11	Fellow of The Royal Society of Chemistry	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H25. 1.16	第18回地下空間シンポジウム 最優秀講演論文賞	減災連携研究センター准教授	廣井 悠	他3名と連名
H25. 1.18	エヌエフ基金 研究開発奨励賞	大学院工学研究科講師	新津 葵一	
H25. 2. 1	Best Poster Presentation Award, ISPlasma 2013	大学院工学研究科特任講師	河合洋次郎	本田善央 (大学院工学研究科助教)、 山口雅史 (大学院工学研究科准教授)、 天野 浩 (大学院工学研究科教授)、 近藤博基 (大学院工学研究科准教授)、 堀 勝 (大学院工学研究科教授) と連名
H25. 2. 4	井上科学振興財団 第29回井上研究奨励賞	大学院工学研究科助教	安井 隆雄	
H25. 2. 4	第9回日本学術振興会賞	物質科学国際研究センター教授	山口 茂弘	
H25. 2. 5	第7回わかしゃち奨励賞最優秀賞	物質科学国際研究センター助教	瀬川 泰知	
H25. 2. 8	平成24年度中谷宇吉郎科学奨励賞	大学院環境学研究科研究員	津滝 俊	
H25. 2.19	有機合成化学協会 企業冠賞 DIC・機能性材料賞	大学院工学研究科教授	忍久保 洋	
H25. 2.19	有機合成化学協会 企業冠賞 第一三共・創薬有機化学賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H25. 2.19	2012年度有機合成化学協会賞	大学院創薬科学研究科教授	北村 雅人	
H25. 2.23	第6回(平成24年度)風戸研究奨励賞	大学院理学研究科研究員	釜崎とも子	
H25. 3. 2	第18回日本軟骨代謝学会賞	医学部附属病院医員	小澤 英史	
H25. 3. 7	平成24年度矢崎学術賞 功績賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H25. 3. 8	NIR Advance Award	大学院生命農学研究科助教	稲垣 哲也	

受賞者一覧

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24. 7.23	Outstanding Poster Presentation Prize, International Symposium on Electron Spin Science	大学院理学研究科 M2	浅田 瑞枝	
H24. 9. 4	第3回進化計算学会研究会 ベストポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	工藤 文也	
H24. 9.21	平成24年電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	坂川慎之助	梅村知也(エコトピア科学研究所准教授)、 他1名と連名
H24.10.14	APES2012 Poster Award, 8th Asia-Pacific EPR/ ESR Symposium	大学院理学研究科 M1	長嶋 宏樹	
H24.10.23	地球電磁気・地球惑星圏学会 第132回講演会 学生発表賞	大学院理学研究科 D3	磯野 靖子	
H24.10.26	第64回日本生物工学会大会 優秀学生発表賞 (セルプロセス計測評価研究部会)	大学院工学研究科 M2	松本 恵	
H24.11. 6	日本化学会一秋季事業 第2回CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	石田 兼基	
H24.11.10	日本航空宇宙学会 第20回衛生設計コンテスト 日本航空宇宙学会賞	大学院工学研究科 M1	藤井 健太	塚原拓矢(工学部4年)、 浅野雄太(大学院工学研究科M1)、 森本祐貴(大学院工学研究科M1)、 浅井 崇(工学部4年)、 吉田健太(工学部4年)、 松井慎太郎(工学部2年)と連名
H24.11.27	文部科学省 新学術領域研究「融合マテリアル」 第5回若手スクール 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	石田 兼基	
H24.11.27	資源・素材学会関西支部 第9回「若手研究者・ 学生のための研究発表会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	坂野 泰隆	
H24.11.30	2012年日本建築学会大会 シェル・空間構造部門優秀発表賞	大学院環境学研究科 M1	池田奈保子	
H24.12. 4	環境情報科学センター 第9回環境情報科学 ポスターセッション 理事長賞	工学部4年	岡崎奈津子	奥岡桂次郎(大学院環境学研究科D3)、 韓 驥(大学院環境学研究科助教)、 白川博章(大学院環境学研究科准教授)、 他1名と連名
H24.12. 5	豊秋奨学会 平成24年度海外渡航旅費助成	大学院教育発達科学研究科 D3	梅本 貴豊	
H24.12.10	Biomacromolecules Poster Prize, Kyoto International Symposium on Biodegradable and Biobased Polymers (KISBP 2012)	大学院工学研究科 M1	鈴木 慎也	
H24.12.10	高分子学会 第43回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	堀江 美記	
H24.12.10	高分子学会 第43回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	中野 辰大	
H24.12.12	Best Paper Award in Robotics Finalist, IEEE ROBIO 2012	大学院工学研究科 D3	リュウ チュンファン	早川義一(大学院工学研究科教授)、 中島 明(大学院工学研究科助教)と 連名
H24.12.13	Excellent Oral Presentation Award in Medical Imaging, 10th South-East Asian Congress of Medical Physics and 12th Asia-Oceania Congress of Medical Physics	大学院医学系研究科 M2	近藤 晋平	
H24.12.13	Best Poster Presentation Award in Medical Imaging, 10th South-East Asian Congress of Medical Physics and 12th Asia-Oceania Congress of Medical Physics	大学院医学系研究科 M2	林 大貴	
H24.12.14	IPC2012 Young Scientist Poster Award, The Society of Polymer Science, Japan	大学院工学研究科 M2	内山 峰人	
H24.12.16	第85回日本生化学会大会 鈴木紘一メモリアル賞	大学院創薬科学研究科 M1	山崎 梨沙	
H24.12.16	第85回日本生化学会大会 鈴木紘一メモリアル賞	大学院生命農学研究科 M2	平野 啓太	内田浩二(大学院生命農学研究科教授)、 河合慶親(大学院生命農学研究科准教授)、 柴田貴広(大学院生命農学研究科助教)と 連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24.12.19	第55回自動制御連合講演会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	岡本 健	
H24.12.20	Best Poster Award, Nagoya Univ.-Tsinghua Univ.-Toyota Motor Corp.-Hokkaido Univ. Joint Symposium – Materials Science and Nanotechnology for the 21st Century	大学院工学研究科 M1	小柳津教之	
H24.12.20	Best Poster Award, Nagoya Univ.-Tsinghua Univ.-Toyota Motor Corp.-Hokkaido Univ. Joint Symposium – Materials Science and Nanotechnology for the 21st Century	大学院工学研究科 M1	三宅 祥平	
H24.12.21	第12回日本ミトコンドリア学会年会 研究奨励賞	大学院理学研究科 M2	佐々木妙子	
H24.12.22	日本表面科学会中部支部 第12回学術講演会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M1	増田 佳穂	
H24.12.22	日本表面科学会中部支部 第12回学術講演会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M1	竹内 大智	
H24.12.25	HASC Challenge 2012 データ収集貢献賞	大学院情報科学研究科 M2	伊藤 義浩	榎堀 優 (大学院情報科学研究科研究員)、 平山高嗣 (大学院情報科学研究科助教)、 間瀬健二 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H25. 1.10	名古屋大学博士課程教育 リーディングプログラム Poster Award, IGER Annual Meeting 2012	大学院工学研究科 D1	村山 恵司	
H25. 1.16	Physical Chemistry Chemical Physics Poster Prize, The 6th EFEPR Winter School on Advanced EPR Spectroscopy	大学院理学研究科 M2	浅田 瑞枝	
H25. 1.17	株式会社デンソー優良賞	大学院情報科学研究科 M1	岩本 友太	
H25. 1.22	平成24年度電気関係学会東海支部連合大会 IEEE 名古屋支部学生奨励賞	大学院工学研究科 M1	服部 晋悟	
H25. 1.22	平成24年度電気関係学会東海支部連合大会 連合大会奨励賞	工学部 4年	須崎 修平	
H25. 1.22	平成24年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 直人	
H25. 1.22	平成24年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	工学部 4年	河合 康平	
H25. 2. 2	平成24年度日本臨床微生物学会 日本バクトン・ディッキンソン賞	大学院医学系研究科 M2	横山 覚	川村久美子 (大学院医学系研究科准教授)、 八木哲也 (大学院医学系研究科教授)、 荒川宜親 (大学院医学系研究科教授) と 連名
H25. 2. 5	第7回わかしゃち奨励賞優秀賞	大学院工学研究科 D3	堀部 貴大	
H25. 2.23	第1回 HSS デザインコンテスト2013 優秀賞	大学院工学研究科 M1	佐溝 恵里	吉川大弘 (大学院工学研究科准教授)、 古橋 武 (大学院工学研究科教授) と 連名
H25. 3. 2	ライフサポート学会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	久田真ノ介	
H25. 3. 4	第3回日本学術振興会 育志賞	大学院法学研究科 D3	福田 真希	
H25. 3. 4	第3回日本学術振興会 育志賞	大学院理学研究科 D3	奥田 哲弘	
H25. 3. 5	平成24年度電子情報通信学会東海支部 卒業研究発表会 優秀卒業研究発表賞	工学部 4年	神野 雄人	
H25. 3. 5	平成24年度電子情報通信学会東海支部 卒業研究発表会 優秀卒業研究発表賞	工学部 4年	須崎 修平	
H25. 3. 7	名古屋大学博士課程教育 リーディングプログラム Annual Research Award	大学院理学研究科 D3	中西 亮	
H25. 3. 7	JCNIRS Student Travel Award	大学院生命農学研究科 M2	比嘉さくら	
H25. 3. 8	情報処理学会第75回全国大会 学生奨励賞	大学院情報科学研究科 M1	西本 恵太	鈴木麗壘 (大学院情報科学研究科准教授)、 有田隆也 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H25. 3. 8	IGER Annual Meeting 2012 & 平成25年度説明会 ポスター賞	大学院理学研究科 D3	川澄 克光	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H25. 3. 8	第28回近赤外フォーラム ベストポスター賞	農学部4年	北村竜之介	土川 覚(大学院生命農学研究科教授)、 小石川将士(大学院生命農学研究科 M2)と 連名
H25. 3. 9	Aiesec Global Internship of the Year 2012	経済学部経済学科3年	佐藤 英恵	

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑨ 運動奔走、なんとか受験 益川敏英本学特別教授	2.16 (土)	朝日(朝刊)
2 第30回 spcafé「合理的な神秘主義」開催: 22日 東京大学教授安富 歩氏元本学助教授が講演	2.16 (土)	中日(朝刊)
3 叙位叙勲: 正四位 荒木一雄本学名誉教授	2.16 (土)	読売
4 特集この人に聞く: どんぐり向方学園長中野昌俊氏本学で農学博士号取得	2.16 (土)	中日ローズ
5 地球を読む: 野依良治本学特別教授	2.17 (日)	読売
6 医学部附属病院は文部科学省の平成24年度橋渡し研究加速ネットワークプログラムの実施拠点と厚生労働省の平成24年度臨床研究中核病院整備事業の対象機関に選定され記念式典が行われた	2.17 (日)	中日(朝刊)
7 医学部附属病院は厚生労働省の小児がん治療の地域拠点に選定された	2.17 (日)	読売
8 濱口総長が第7期科学技術・学術審議会委員に任命される	2.18 (月)	日刊工業
9 現代日本誤百科(755):「スラロームを作る」町田 健文学研究科教授	2.18 (月)	中日(朝刊)
10 未来を拓く大学 番外編: 本学で行われた読売講座「比較アジア社会論」についてネイ・チー・ウーさん本学博士課程2年生の感想を掲載	2.18 (月)	読売
11 中日文化センター講座:「相対性理論をわかりやすく読み解く」杉山 直理学研究科教授	2.18 (月)	中日(夕刊)
12 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑩ のびのび「E研」民主的 益川敏英本学特別教授	2.19 (火)	朝日(朝刊)
13 ひと輝いて: 中性子ビームを実験に活用 清水裕彦理学研究科教授	2.19 (火)	毎日(朝刊)
14 研究現場発: 赤果肉りんごの育種 松本省吾生命農学研究科教授	2.19 (火)	中部経済新聞
15 現代日本誤百科(756):「当面の現状維持」町田 健文学研究科教授	2.19 (火)	中日(朝刊)
16 教育学部附属中学校・高等学校長に植田健男教育発達科学研究科教授を選出	2.19 (火)	中日(朝刊)
17 濱口総長が本部員を務める愛知県と名古屋市の有識者会議「中京独立戦略本部」の第3回会合が開かれた	2.19 (火)	中日(夕刊)
18 第26回博物館企画展「ポタニカルアートと明治の博物画」開催: 9日～3月9日	2.19 (火)	中日(朝刊)
	2.20 (水)	朝日(夕刊)
	2.27 (水)	朝日(夕刊)
	2.28 (木)	中日(夕刊)
19 第31回 名大カフェ“Science, and Me”「生命は機械仕掛けなのか? 回転するべん毛モーターから学ぶ生命原理」開催: 3月6日 本間道夫理学研究科教授が講演	2.19 (火)	中日(朝刊)
	2.26 (火)	読売
20 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑪ 速報会の「小骨」きっかけ 益川敏英本学特別教授	2.20 (水)	朝日(朝刊)
21 復権モノづくり第2部新産業革命への序章⑥: iPS細胞の研究施設を野依良治本学特別教授、安倍晋三首相と京都大学教授山中伸弥氏の3名が視察した際の写真が紹介される	2.20 (水)	日刊工業
22 現代日本誤百科(757):「涙が君の瞳をこぼれた」町田 健文学研究科教授	2.20 (水)	中日(朝刊)
23 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑫ 会費制「友前式」で結婚式 益川敏英本学特別教授	2.21 (木)	朝日(朝刊)
24 現代日本誤百科(758):「昨日より快晴」町田 健文学研究科教授	2.21 (木)	中日(朝刊)
25 遺伝子実験施設長に木下俊則理学研究科教授を選出	2.21 (木)	中日(朝刊)
26 第87回防災アカデミー「大災害と法-災害復興の壁になる制度と被災者を救う法制度」開催: 26日	2.21 (木)	読売
27 生源寺眞一生命農学研究科教授が審査委員長を務める第72回中日農業賞について講評する	2.21 (木)	中日(朝刊)
28 医学系研究科などの研究チームは先天性血小板減少症の原因遺伝子を発見	2.22 (金)	中日(朝刊)
		朝日(朝刊)
29 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑬ 共同研究 天満宮で決定 益川敏英本学特別教授	2.22 (金)	朝日(朝刊)
30 本学の女性教員の実数増加が33人となり国立大学の女性教員比率の目標達成へ努力が数値で裏づけされた	2.22 (金)	日刊工業
31 北神慎司環境学研究科准教授などは報酬を約束して課題に取り組むと無意識に記憶力が高まることを明らかにした	2.22 (金)	中日(朝刊)
	2.26 (火)	毎日(朝刊)
32 本学との大学間学術交流協定の更新のためタイ王国のチュラポーン王女が来学	2.23 (土)	中日(朝刊)
33 愛知(ここ)に人あり: <i>φιλοσοφία</i> 愛される知⑭ 受賞論文、風呂で発想 益川敏英本学特別教授	2.23 (土)	朝日(朝刊)
34 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催: 11日 益川敏英本学特別教授が講演と討論を行う	2.23 (土)	読売
35 シンポジウム「ノロウイルス対策とラクトフェリン-大切な人を感染症から守るために-」開催: 4日 松田 幹生 命農学研究科教授が講演	2.23 (土)	朝日(朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
36 名古屋市女性会館公開講座「地球からのおくりものー植物がつくりだす生物多様性ー」：3月2日 西田佐知子博物館准教授が講演	2.23 (土)	朝日 (朝刊)
37 私の視点：今津孝次郎本学名誉教授	2.23 (土)	朝日 (朝刊)
38 中日新聞フォーラム「大震災と防災を考える」開催：9日 福和伸夫減災連携研究センター教授が減災の立場から提言	2.23 (土)	中日 (朝刊)
39 朝日カルチャーセンター新講座：「カント『純粹理性批判』を読む」宮原 勇文学研究科教授	2.24 (日)	朝日 (朝刊)
40 社説：故坂田昌一本学名誉教授が原子力委員会専門部会委員を辞任した経緯が紹介される	2.24 (日)	中日 (朝刊)
41 桃・柿育英会「みらいをひらく！スクールプロジェクト」開催：8日 野依良治本学特別教授が講演	2.25 (月)	読売
42 つくろう！日本 東日本大震災2年：山本章夫工学研究科教授は「安全確保に不可欠な技術基盤を強化し、人材を輩出することが大学の原子力研究で重要になるだろう」と語る	2.25 (月)	日刊工業
43 現代日本誤百科 (759)：「水に充たされた水田」町田 健文学研究科教授	2.25 (月)	中日 (朝刊)
44 本学で個別学力検査前期日程が始まり、受験生の様子が紹介される	2.25 (月)	中日 (夕刊)
45 野村信嘉生命農学研究科准教授は日立造船株式会社、東北電力株式会社と共同で結晶性ポリ乳酸の量産技術を開発	2.25 (月)	日刊工業
46 本学で個別学力検査前期日程が始まり約4600人が受験	2.26 (火)	読売
47 工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターは日本ゼオン株式会社と共同で高密度集積回路の高精密化技術を開発	2.26 (火)	日刊工業
48 第6回風戸研究奨励賞 釜崎とも子理学研究科研究員	2.26 (火)	日刊工業
49 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑤ 引き継いだ反核運動 益川敏英本学特別教授	2.26 (火)	朝日 (朝刊)
50 河合塾による本学の個別学力検査前期日程の出題分析	2.26 (火)	中日 (朝刊)
	2.27 (水)	中日 (朝刊)
51 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑥ 南部先生に認められた 益川敏英本学特別教授	2.27 (水)	朝日 (朝刊)
52 現代日本誤百科 (760)：「あの人の本当の真実」町田 健文学研究科教授	2.27 (水)	中日 (朝刊)
53 第31回 spcafé「分類構築の心理学と系統推定の歴史学ーオブジェクト多様性を体系化する精神について」：3月6日 農業環境技術研究所上席研究員三中信宏氏が講演	2.27 (水)	中日 (朝刊)
54 公開講演会「防災・減災と私たちの生き方」開催：3月23日 福和伸夫減災連携研究センター教授が講演	2.27 (水)	中日 (朝刊)
55 本学と立命館大学、久留米大学などは共同で光合成生物が近赤外光線を吸収できるクロロフィルを生産する仕組みを発見	2.28 (木)	日刊工業
56 本学は3月にベトナム司法省と連携協定を結び同国の司法官僚育成を行う	2.28 (木)	中日 (朝刊)
57 本学などが窓口となり自然科学研究機構基礎生物学研究所が災害に備えるため研究で使用する細胞や遺伝子が無償で預かるバックアップ拠点を開設	2.28 (木)	中日 (朝刊)
58 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑦ オーディオ夢中の10年 益川敏英本学特別教授	2.28 (木)	朝日 (朝刊)
59 現代日本誤百科 (761)：「にわか急を告げる」町田 健文学研究科教授	2.28 (木)	中日 (朝刊)
60 松尾清一医学部附属病院長と石黒直樹医学系研究科教授、若林俊彦同教授、小島勢二同教授が小児がんについて語る	2.28 (木)	朝日 (朝刊)
61 情報文化学部長に神保雅一情報科学研究科教授を選出	3. 1 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
62 訃報：松岡 理本学名誉教授	3. 1 (金)	中日 (朝刊) 他2社
63 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑧ うつ、20年に一度来る 益川敏英本学特別教授	3. 1 (金)	朝日 (朝刊)
64 内閣府人事：総合科学技術会議議員 トヨタ自動車株式会社副会長内山田竹志氏本学卒業生	3. 1 (金)	読売
65 本学のプロジェクトが文部科学省の平成24年度国立大学改革強化推進事業に選ばれた	3. 1 (金)	日経 (夕刊) 中日 (夕刊)
66 坪井泰樹さん工学研究科2年生が代表を務める聴覚障害のある理系大学生らの学生団体「Deaf Science Organization (DSO)」が8、9日に交流会を開催	3. 1 (金)	中日 (夕刊)
67 福和伸夫減災連携研究センター教授は3月3日に設立した「東海圏減災研究コンソーシアム」について「他大学と連携し有効な防災対策を構築したい」と語る	3. 2 (土)	毎日 (朝刊)
	3. 4 (月)	朝日 (朝刊) 他2社
68 再生への提言 東日本大震災 2年：益川敏英本学特別教授	3. 2 (土)	毎日 (朝刊)
69 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑨ 実験家の莫大な努力 益川敏英本学特別教授	3. 2 (土)	朝日 (朝刊)
70 附属図書館医学部分館ミニ展示会「不思議!? 解剖図ーヴェサリウスから奈良坂源一郎までー」開催：2月5日～5月10日	3. 2 (土)	朝日 (朝刊)
71 インタビュー：ぞみ出さない工夫、非常時に有効 豊橋技術科学大学特任研究員岡山朋子氏元エコトピア科学研究所特任講師	3. 2 (土)	中日 (朝刊)
72 福和伸夫減災連携研究センター教授と脇田久美子同技術補佐員などは標高5m未満の地域に国内人口の2割に近い約2,200万人が住んでいるという調査結果を明らかにした	3. 3 (日)	朝日 (朝刊)
73 吉田忠雄医学部附属病院診療科助教が耳のメカニズムについて解説	3. 3 (日)	中日 (朝刊)
74 病院の実力：緩和ケア 医学部附属病院の実績が取り上げられる	3. 3 (日)	読売
75 大学教育改革フォーラム in 東海2013開催：2日	3. 3 (日)	中日 (朝刊)
76 現代日本誤百科 (762)：「記憶を忘れる」町田 健文学研究科教授	3. 4 (月)	中日 (朝刊)
77 備える3.11から第64回東日本大震災2年：福和伸夫減災連携研究センター教授、隈本邦彦同客員教授	3. 4 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
78 発達心理精神科学教育研究センター公開レクチャー「フィンランドの教育システム」開催：6日	3. 4 (月)	中日 (朝刊)
79 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知 ^② ノーベル賞、息子に謝る 益川敏英本学特別教授	3. 5 (火)	朝日 (朝刊)
80 現代日本誤百科 (763)：「99.9% 治しきる」町田 健文学研究科教授	3. 5 (火)	中日 (朝刊)
81 怪しい前兆“地震予知”のいま：下 日本の研究 変わるか 鷺谷 威減災連携研究センター教授が地震予知について語る	3. 5 (火)	中日 (夕刊)
82 本学は医学系研究科に新設する統合医薬学領域に産学連携講座「医薬品開発学講座」を開講	3. 6 (水)	日経 (朝刊)
83 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知 ^① 初の海外、驚きいっぱい 益川敏英本学特別教授	3. 6 (水)	朝日 (朝刊)
84 現代日本誤百科 (764)：「指紋は唯一無二」町田 健文学研究科教授	3. 6 (水)	朝日 (朝刊)
85 春季特別講演会「腎臓病と上手に付き合うために」開催：31日 医学部附属病院中央診療棟3階講堂	3. 6 (水)	読売
86 石原一彰工学研究科教授、波多野 学同准教授、堀部貴大さん本学大学院生らは製薬などに必要な触媒を有機物と金属を混ぜるだけで自由に設計し作り出す方法を開発	3. 7 (木)	中日 (朝刊) 他2社
87 工学研究科附属プラズマ工学研究センターは高密度集積回路を製造する時のエッチングで凹凸形状が発生する構造を解明	3. 7 (木)	日刊工業
88 篠原久典理学研究科教授と北浦 良同准教授などは表面は電気を通すが中は通さない外径約1ナノメートルの2層構造のナノチューブを開発	3. 7 (木)	日刊工業
89 近藤ひろ子減災連携研究センター技術補佐員や愛知県などの防災教育担当者らが防災への取り組みなどを説明するため12～21日の日程でブラジル南東部ミナスジェライス州を訪問	3. 7 (木)	中日 (朝刊)
90 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知 ^② 在野の研究者を支える 益川敏英本学特別教授	3. 7 (木)	朝日 (朝刊)
91 現代日本誤百科 (765)：「新しい新車の乗り方」町田 健文学研究科教授	3. 7 (木)	中日 (朝刊)
92 博物館コンサート「愛と自然のバロック音楽－イギリス、フランスの香り－」開催：9日	3. 7 (木)	読売
93 古川鋼一医学系研究科教授と近藤裕史同 COE 特任助教などのグループがエンドトキシショックを和らげる効果のある糖脂質「Gb4」を発見	3. 8 (金)	中日 (朝刊)
94 本学が文部科学省の地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業に採択される	3. 8 (金)	日刊工業
95 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知 ^③ 完 憧れは突き進む原動力 益川敏英本学特別教授と小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授のノーベル賞受賞後の写真が紹介される	3. 8 (金)	朝日 (朝刊)
96 名古屋大学オープンレクチャー2013開催：20日 石原一彰工学研究科教授や坂井亜規子環境学研究科特任助教などが現在行っている研究について解説	3. 8 (金) 3.14 (木)	読売 中日 (朝刊)
97 荒川宜親医学系研究科教授は米国で抗生物質が効かない腸内細菌の検出が10年前の4倍になったことについて「国内の広がりには確認されていないが、今後の動向に注意が必要だ」と語る	3. 8 (金)	朝日 (夕刊)
98 平成24年度矢崎学術賞功績賞 石原一彰工学研究科教授	3. 9 (土)	中日 (朝刊)
99 山岡耕春環境学研究科教授が東海テレビの報道特別番組「地震と生きる時代」の解説者として出演	3. 9 (土)	中日 (夕刊)
100 愛知学院大学モーニングセミナー：12日 木村宏之医学部附属病院講師が講演	3. 9 (土)	中日 (朝刊)
101 本学の望遠鏡もそばに設置されているチリのアルマ望遠鏡の開所式が13日に開かれ本格運用を開始する	3. 9 (土)	中日 (夕刊)
102 本学の大学院生が取り組む国内外の地域の課題を調査し解決策を提案するプログラムが紹介され清水裕之環境学研究科教授が「これからも地区の人々と交流を続け、成果を還元していきたい」と語る	3. 9 (土)	毎日 (夕刊) 日経 (夕刊)
103 本学が前期日程入学試験の合格者を発表	3. 9 (土) 3.10 (日)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売
104 4月に開設する医学系研究科附属クリニカルシミュレーションセンターについて植村和正医学系研究科教授が「幅広い経験と多くの職種に対応できるセンターにしていきたい」と語る	3.10 (日)	中日 (朝刊)
105 福和伸夫減災連携研究センター教授が南海トラフ巨大地震への備えについて語る	3.10 (日)	読売
106 本学など国立7大学と自然科学研究機構・基礎生物学研究所が連携し災害に備え生物遺伝資源を保管する「大学連携バイオバックアッププロジェクト」が同研究所内に開設	3.10 (日) 3.12 (火)	読売 朝日 (朝刊)
107 現代日本誤百科 (766)：ぜいたく好きな「日本人に一石を投じる」町田 健文学研究科教授	3.11 (月)	中日 (朝刊)
108 紙つづて：科学と政治 野依良治本学特別教授	3.11 (月)	中日 (夕刊)
109 長谷川好規医学系研究科教授と金沢大学は肺がん治療で使われるイレッサが効かない患者向けの治療法を開発	3.12 (火)	日経 (朝刊)
110 現代日本誤百科 (767)：「もしも地震が起きた時身を守る家」町田 健文学研究科教授	3.12 (火)	中日 (朝刊)
111 第30回 (平成24年度) 永井科学技術財団 財団賞学術賞 鳥本 司工学研究科教授、小橋 真同准教授、同奨励賞 小堀 聡経済学研究科准教授、研究奨励金 澤田佳代エコトピア科学研究所准教授、共同研究奨励金 齋藤永宏グリーンモビリティ連携研究センター教授のグループ	3.12 (火)	日刊工業
112 高校生 News：本学が協力し私立滝中学校・高等学校の生徒が放射線の通った跡を見られる装置「霧箱」の製品化に取り組む	3.12 (火)	中日 (朝刊)
113 水野正明医学部附属病院教授と堀 勝工学研究科教授はプラズマを照射した培養液が脳腫瘍培養細胞や卵巣がん培養細胞と正常な細胞を選んで殺傷できることを突き止めた	3.13 (水)	日刊工業
114 2012年度日本学士院賞 巽 和行物質科学国際研究センター教授	3.13 (水)	中日 (朝刊) 他4社
115 現代日本誤百科 (768)：すべては「私に責めがある」町田 健文学研究科教授	3.13 (水)	中日 (朝刊)
116 Be Ambitious! リケジョが拓こう、イノベーションの扉開催：12日	3.13 (水)	朝日 (朝刊)

記事	月日	新聞等名
117 第45回市村学術賞貢献賞 石原一彰工学研究科教授「デザイン型ヨウ素触媒を用いる選択的有機変換反応の開発と実用化」	3.14 (木)	日刊工業
118 現代日本誤百科 (769) :「歯牙にもかからなかった」町田 健文学研究科教授	3.14 (木)	中日 (朝刊)
119 腎臓病啓発特集:松尾清一医学部附属病院長が慢性腎臓病について解説	3.14 (木)	朝日 (朝刊)
120 きょう「世界腎臓デー」予防・早期発見への取り組み:安田宜成医学系研究科寄附講座准教授	3.14 (木)	読売
121 大平英樹環境学研究科教授は懐かしさは単に後ろ向きの感情ではないと語る	3.14 (木)	朝日 (夕刊)
122 間瀬健二情報科学研究科教授などは衣服そのものにセンサ機能を持たせて呼吸状態を把握できるシステムを開発	3.14 (木)	日経 (朝刊)
123 新美輝幸生命農学研究科助教などは昆虫に隠された羽があることを突き止めた	3.15 (金)	中日 (朝刊)
124 松尾清一医学部附属病院長が同病院の敷地内に建設するドナルド・マクドナルド・ハウスなごやの建設費用の目録を愛知県医師信用組合から受け取った	3.15 (金)	中日 (朝刊)
125 本学が参加する文部科学省の大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業のシンポジウムが開かれた	3.15 (金)	読売
126 「愛知県史」別編 (彫刻) の刊行近づく:和歌山県立博物館長伊東史朗氏本学卒業生	3.15 (金)	中日 (夕刊)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
<p>2月5日(火)～5月10日(金) 場 所: 附属図書館医学部分館 2階入口ホール 時 間: 9:00～20:00 (平日) 13:00～17:00 (土曜日) 休 館 日: 日・祝日 入 場 料: 無料</p> <p>[問い合わせ先] 附属図書館医学部分館 052-744-2505</p>	<p>附属図書館医学部分館第3回ミニ展示会 「不思議!? 解剖図 ーヴェサリウスから奈良坂源一郎までー</p>	
<p>3月25日(月)～7月20日(土) 場 所: 博物館2階展示室 時 間: 10:00～16:00 休 館 日: 日・月曜日、 6月9日(日) 臨時開館 入 場 料: 無料</p> <p>[問い合わせ先] 博物館事務局 052-789-5767</p>	<p>第17回博物館特別展 「くじらクジラ 鯨ー骨からわかるからだの秘密 そして人とのかかわりー</p> <p>内 容: 2009年に名古屋港に漂着したマッコウクジラの骨格標本と制作過程の写真や映像、江戸時代の捕鯨で使われた道具の展示</p> <p>[関連講演会] 場 所: 博物館3階講義室 時 間: 14:00～15:30 対 象: 一般 参 加 費: 無料</p> <p>4月23日(火) 講演題目: 「クジラー知られざる鯨類の世界ー」 講 演 者: 中江 環氏 (太地町立くじらの博物館学芸員)</p> <p>5月28日(火) 講演題目: 「鯨は六鯨と申し候: 太地における人とクジラの多様な関係」 講 演 者: 櫻井敬人氏 (太地町公民館歴史資料室学芸員)</p>	
<p>4月18日(木)、19日(金) 場 所: 野依記念学術交流館 時 間: 10:00～17:30 (4/18) 9:30～16:40 (4/19)</p> <p>[問い合わせ先] トランスフォーマティブ 生命分子研究所事務局 052-747-6840</p>	<p>トランスフォーマティブ生命分子研究所 キックオフシンポジウム 「The 1st International Symposium on Transformative Bio-Molecules 2013」</p>	

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月18日(木)

場 所：理学部E館 1階クレイグスカフェ
時 間：17:00～18:30
対 象：一般
参 加 費：無料（会場にてドリンク等の注文が必要）

第32回 spcafé

講演題目：「科学技術の報道はうさんくさい？」
講 演 者：藤吉隆雄（産学官連携推進室特任助教）



[問い合わせ先]

生命農学研究科
助教 大場裕一 052-789-4280

4月19日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：14:00～17:00
対 象：関係研究者
参 加 費：無料

平成24年度活動報告会

減災連携研究センターエネルギー防災寄附研究部門

講 演 者：武村雅之（減災連携研究センター寄附研究部門教授）、
都築充雄（同寄附研究部門准教授）、
虎谷健司（同寄附研究部門助教）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

4月20日(土)

場 所：博物館 2階実験室、展示室、
東山キャンパス構内
時 間：12:50～16:00
定 員：各回20名
対 象：小学5年生以上、一般
参 加 費：50円（保険料）

ミクロの探検隊®

テ ー マ：「ホニュウ類の組織を電子顕微鏡で見よう」
内 容：生物顕微鏡、走査型電子顕微鏡を使用し、すい臓や気管などの組織を観察し形と働きを学ぶ



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

4月23日(火)

場 所：ES 総合館 1階 ES 会議室
時 間：13:40～16:00
定 員：20名
対 象：学生の保健管理のスタッフ
参 加 費：無料

総合保健体育科学センター

**「大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会：
青年の自殺」**

講演題目：「フランスにおける青年の自殺：治療の統計」
講 演 者：コリンヌ・クララク氏、
ステファニー・ヌヴィエール氏（ストラスブール大学）
内 容：学生の保健管理についての学術交流会

[問い合わせ先]

総合保健体育科学センター
助教 古橋忠晃 052-789-5778



4月23日(火)

場 所：文系総合館 7階オープンホール
時 間：16:00～18:00
対 象：本学および近隣の大学関係者
参 加 費：無料

高等教育研究センター

第114回招へいセミナー

講演題目：「フランスの大学における成人向け継続教育の現状と課題」
講 演 者：ジャン・マリー・フィロック氏（西ブルターニュ大学副学長）

[問い合わせ先]

高等教育研究センター
教授 夏目達也 052-789-5696



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月24日(水)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
 時 間：18:00～19:30
 定 員：120名
 対 象：一般
 参 加 費：無料

第89回防災アカデミー

講演題目：「心の減災入門ー備えあれば心は健康ー」
 講 演 者：松本真理子（発達心理精神科学教育研究センター教授）
 内 容：臨床心理学関連



[問い合わせ先]
 減災連携研究センター 052-789-3468

4月27日(土)

場 所：博物館 2階展示室
 時 間：14:00～15:00
 参 加 費：無料

第50回博物館コンサート

「爽やかな風にのせてーミュージックベルの調べー」
 出 演：Sonnette (ソネット)



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

5月8日(水)

場 所：カフェフロンテ
 時 間：18:00～19:30
 定 員：50名
 対 象：一般
 参 加 費：無料（会場にてドリンク等の注文が必要）

第24回げんさいカフェー Gen Science Café

テ ー マ：「研究者と市民とが対話するサイエンスカフェ」
 講 演 者：古本宗充（環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授）
 内 容：固体地球惑星物理学関連

[問い合わせ先]
 減災連携研究センター 052-789-3468

5月10日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
 時 間：14:00～17:00
 定 員：80名
 対 象：関係研究者、実務者
 参 加 費：無料

**第1回減災連携研究センター
 ライフライン・地盤防災シンポジウム**

テ ー マ：「ライフラインを中心とした地盤防災と地震動想定」
 講演題目：「ライフライン地震工学の現状と今後の課題（仮題）」
 講 演 者：楢田泰子氏（神戸大学准教授）
 講演題目：「最近の地盤工学の研究動向について（仮題）」
 講 演 者：野田利弘（減災連携研究センター教授）
 講演題目：「減災連携研究センター
 ライフライン地盤防災寄附研究部門活動報告」
 講 演 者：北野哲司（減災連携研究センター寄附研究部門教授）、
 宮腰淳一（同准教授）、
 野中俊宏（同助教）



[問い合わせ先]
 減災連携研究センター 052-789-3468

5月11日(土)、11月16日(土)

場 所：博物館野外観察園、展示室
 時 間：13:00～15:00
 対 象：一般
 参 加 費：無料

博物館野外観察園見学会

案 内：西田佐知子（博物館准教授）、他



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月11日(土)

場 所：博物館 3階講義室
 時 間：13:00～15:00
 定 員：15組
 対 象：小学4年生から中学3年生とその保護者（中学生は個人参加可）
 参 加 費：500円（1組）

博物館ワークショップ

テ ー マ：「くじらのひげで靴べらを作ろう」
 講 師：内田昌宏氏（富士市立富士第一小学校教諭）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

5月18日(土)、6月1日(土)、 6月15日(土)、6月22日(土)、 6月29日(土)

場 所：博物館 3階講義室
 時 間：10:30～12:00
 定 員：80名
 対 象：一般（基本的に毎回参加できる人）
 参 加 費：無料

名古屋市生涯学習推進センター

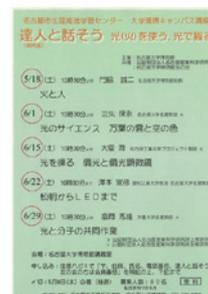
大学連携キャンパス講座

「達人(研究者)と話そうー光(火)を使う、光で観るー」

講演題目：「光と人」(5/18)
 講 演 者：門脇誠二（博物館助教）
 講演題目：「光のサイエンス 万葉の雲と空の色」(6/1)
 講 演 者：三矢保永（本学名誉教授）
 講演題目：「光を操る 偏光と偏光顕微鏡」(6/15)
 講 演 者：大里 齊氏（名古屋工業大学プロジェクト教授）
 講演題目：「松明からLEDまで」(6/22)
 講 演 者：澤木宣彦（本学名誉教授）
 講演題目：「光と分子の共同作業」(6/29)
 講 演 者：富岡秀雄氏（三重大学名誉教授）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



6月14日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
 時 間：14:00～17:00
 対 象：関係研究者
 参 加 費：無料

平成24年度活動報告会

減災連携研究センター地域社会減災計画寄附研究部門

講演題目：「減災計画に関する研究成果や社会連携に関する成果の報告（仮題）」
 講 演 者：首根好徳（減災連携研究センター寄附研究部門教授）、
 倉田和己（同助教）、
 山崎雅人（同助教）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

6月29日(土)

場 所：博物館 2階展示室
 時 間：14:00～
 参 加 費：無料

博物館落語会「名大博物館で落語を聴こう！」

出 演：桂 九雀氏（落語家）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.239 平成25年4月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

平成24年度卒業式
 (平成25年3月25日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
 (<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

132 学部の誕生と草創期⑥ — 経済学部 —

経済学部は、1948(昭和23)年9月に法経学部として設置されたのち、50年4月から経済学部として独立しましたが、その誕生には特徴的な経緯があります。

第2次世界大戦後、名古屋大学は待望の文系学部の設置をめざしましたが、経済学部の母体として期待されたのが、名古屋経済専門学校(名経専)です。名経専は、1920(大正9)年に官立の名古屋高等商業学校(名高商)として創設され、特色ある実践主義教育と大学にも例えられるほどの高いレベルの研究をほこる、日本屈指の高等商業教育機関としての歴史を有していました。

しかし、そういった学校であるがゆえに、戦後になると単科大学に昇格することをめざす運動が盛り上がったのです。早くも1945(昭和20)年から学生を中心に動きが見られ、まもなく学校側や同窓会である其湛会(現在のキタン会)も本格的に乗り出し、教職員・学生・卒業生を一丸とする昇格期成同盟が結成されました。当時の野本悌之助校

長は、中部日本新聞(現在の中日新聞)に対し、「本校は名は専門学校だが実質的には大学以上だ」「教授と生徒と私と三者が同歩調でビジネス・カレッジの建設に進んでいる」などと、単独で経営大学となることへの意気込みを語っています。

その後、学校側が方針を変え、学生や其湛会を説得する形で名大へ合流することになりましたが、今度は文系学部の編成をめぐる問題が持ち上がりました。結局、予算の関係で、当面は文学部と法経学部として設置されることになったのです。

名経専は、1949(昭和24)年5月の新制移行と同時に名大に包括され、51年3月に廃止されました。それでも経済学部は、法経学部経済学科・経営学科として設置当時の専任教員の多くが名経専から就任し、校舎も名経専のものをそのまま使用するなど、名経専(名高商)の雰囲気や伝統を色濃く引き継ぐ形で歩み始めたのでした。



- | | | |
|---|---|---|
| 2 | 3 | 1 |
| 4 | 5 | |
- 1 文系学部の編成をめぐる問題を報じる『名古屋経専新聞』(1948年4月30日付)。名経専は、文系学部を一学部のみ(法文学部)とする案には、断固反対する姿勢をとった。
 - 2 1954年の経済学部経済学科卒業生(新制第2回)。
 - 3 経済学部教授会の様子(1954年頃)。
 - 4 名大桜山キャンパス(1948～1959年)。ここには経済学部と名大の学生寮(嚶鳴寮)があり、ほとんどが名経専時代からの建物であった。跡地は、名古屋市立大学川澄キャンパス(医学部、附属病院など)になっている。
 - 5 桜山時代の校舎。撮影は東山への移転直前の1959年春。